

大学・附属学校共同研究会
「大学・附属学校園共同研究の課題と可能性」
報告書

教職キャリアセンター・教科教育学研究部門
H31.3.29

目次

はじめに	1
第1章 研究会の趣意と概要	3
第2章 研究会第一部のまとめ	21
第3章 研究会第二部のまとめ	61
おわりに	71
謝辞	72

はじめに

本報告書は、2018年12月9日(日)にウインクあいちで開催された教職キャリアセンター・教科教育学部門主催の研究会「大学・附属学校園共同研究の課題と可能性」の開催に至るまでの経緯と研究会の概要を報告するものである。

本年度、教職キャリアセンター・教科教育学部門では、「附属学校園との新たな共同研究」というテーマで研究を進めていくことになった。その際、附属学校園が抱える潜在的な研究課題を掘り起こし、今後の大学・附属共同研究の在り方を検討して、何らかの具体的方向性や成果を出す意味でも、教科教育学部門として学長裁量経費を申請して研究を進めてはどうかというご提案が出ることになった。

というのも、当該テーマの研究に関しては、月1回の教科教育学研究部門例会を基本とするにしても、第1章で詳述する「今後の附属学校園の役割・在り方」について検討するためには、大学・附属共同研究会のメンバー（大学及び附属学校園教員が含まれる）に加えて、附属学校教員OB/OGや公立学校教員等の参加を募って意見徴収・交換ができる会を催すことは必要であり、そこには必然、交通の利便性が高い学外会場での実施が求められるだろう（必然、経費もかかるだろう）、という意見があったからである。

こうして、4月の例会以降に急遽、年末の学外研究会実施を目指した学長裁量申請が決まることになった。学長裁量経費申請に当たっては、教職キャリアセンター・教科教育学部門の大学・附属学校共同研究会としての申請が最適だろうということで、部門長を研究代表者として、各教科分科会代表者の連名で申請を行うことになった。この場を借りて、各教科分科会の代表者の皆様にはお礼を申し上げたい。

その後、学長裁量経費は無事採択され、12月9日にウインクあいちで「大学・附属学校園共同研究の課題と可能性」と題する研究会を開催することができた。参加者は、休日ながら学内外より総計80名にも及び、この種のテーマに関する関心の大きさをうかがい知ることができた（詳細は第2章・第3章）。

本報告書は、上記のような経緯と12月9日の研究会の概要を報告するが、報告内容にもある通り、研究会では学内外より多くの意見・課題・提案を頂くことができた。本報告書が、今後の大学・附属学校共同研究体制の更なる発展に貢献すれば幸いである。

教科教育学研究部門部門長
山田篤史

第1章：研究会の趣意と概要

1. 研究会開催の背景と趣意書の作成まで

「はじめに」でも述べたように、本年度、教職キャリアセンター・教科教育学部門では、「附属学校園との新たな共同研究」というテーマで研究を進めていくことになり、その際、今後の大学・附属共同研究の在り方を検討して、何らかの具体的方向性や成果を出してはどうかという提案が出ることになった。具体的には、当該テーマの研究に関する毎月の教科教育学研究部門例会とは別に、大学・附属共同研究会のメンバー（大学及び附属学校園教員が含まれる）に加えて附属学校教員 OB/OG や公立学校教員等の参加を募って意見徴収・交換ができる会を催してはどうか、という提案であった。

そうした提案が行われた背景には、平成 29 年 8 月 29 日に発表された「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて：国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書」（国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議，2017.8.29）がある。この報告書には、タイトルにもある通り、国立大学法人の附属学校の改革に対する意見も報告されている。中でも、「国立大学附属学校についての課題」として、「在り方や役割の見直し」「大学との連携」「地域との連携」「成果の還元」が挙げられており、こうした課題を本学と附属学校園（の教員や関係者）はどのように捉えているかは、教科教育学研究部門としても興味深い所であった。もちろん、上記報告書には、それらの課題に対する対策も提案されているのだが、そもそもそれらの課題が真の我々の課題であるかは検討に付してよい所であるし、むしろより大きく優先順位が高い課題があれば、その課題に対する対策を立てるべきであろう。

こうした問題意識を基に、まずは、教科教育学研究部門第1回例会（4月25日）以降に、大学・附属学校共同研究会の各教科代表者の連名で学長裁量経費を申請して、次頁の趣意書に示すような研究会を開催することを計画することにした次第である。

趣意書は、学長裁量経費申請書（5月25日申請）をベースにしているが（それ故、申請に深く関わった現部門長と前部門長丹藤博文先生の考えをベースにしているが）、教科教育学研究部門第2回例会（5月30日）での内容検討、学長裁量経費採択に関わって生じた修正、教科教育学研究部門第3回例会（6月27日）での内容検討を経て作成された。4月当初の計画より大きく代わった点は、当初、パネルディスカッションだけであったプログラムに関して、小集団で議論ができるような時間も設け、二部構成にしたところである。こうしたプログラムに関する詳細は、教科教育学研究部門例会での意見を踏まえたものである。

こうした経緯を経て作成された研究会の趣意書は、7月30日の第2回教職キャリアセンター委員会や8月2日を中心に行われた大学・附属学校共同研究会夏期一斉研修会等で学内に周知されることになった。

平成30年7月吉日

愛知教育大学 大学・附属学校共同研究シンポジウム 趣意書

愛知教育大学・教職キャリアセンター
教科教育学研究部門長 山田篤史

「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて：国立教員養成大学・学部、大学院，附属学校の改革に関する有識者会議報告書」（平成29年8月29日）にもある通り，附属学校の存在意義・役割・特色の明確化が求められるようになってきた。附属学校の存在意義・役割・特色は各学校園の研究にこそ集約・実現されているが，一方では，働き方改革の推進によって，その研究に対する附属学校教員の過重負担が問題視されるようになってきている。働き方改革を進めつつ，有識者会議の言う地域に開かれた学校や公立学校にとっても有効な汎用性のある研究等を具体化することは容易なことではない。各学校は，それぞれ手探りで検討しているのが実態である。

こうした現状に鑑み，教職キャリアセンター・教科教育学研究部門では，本年度のテーマを「附属学校との新たな共同研究」とし，各附属学校園の研究の一翼を担う大学・附属共同研究の新しい形を模索していくこととなった。附属学校園における新たな研究の姿を検討する作業は，各附属学校園に任せきりにされるものでもなく，むしろ，大学の研究者と一体となって進められる必要があろう。また，各附属学校園が孤立するのではなく，他の附属学校との交流により，相互に実態を共有することも重要であろう。さらに，公立学校に向けた汎用性のある研究を模索するためには，公立学校の意見を取り入れていくことも欠かせないだろう。

こうした幾つかの要求の存在を背景にしつつ，新たな大学・附属学校園共同研究に関して情報を共有し，その在り方の今後の方向性を探るため，シンポジウムの開催を計画することにした。具体的には，附属学校園・公立学校・大学のそれぞれから登壇者を募り，以下の3点について議論し，今後の大学・附属学校共同研究の課題と方向性を探るのが目標である。

- (1) 附属学校園と公立学校が抱える（今後扱いたい）研究課題。特に，両者の共通課題と個別課題について。
- (2) 現行の大学・附属共同研究体制を踏まえた各附属学校園における「教員研修機能」の現状と課題について。
- (3) 大学・附属共同研究体制が果たしうる役割と研究課題の新たな方向性。特に，附属学校教員を含む地域の現職教員の指導力向上と公立学校に向けた汎用性のある研究テーマについて。

■ シンポジウム計画（現行案）

1. 研究主題： 大学・附属学校園共同研究の課題と可能性
2. 日 時： 2018 年 12 月 9 日（日） 13:00～17:00
3. 会 場： ウィンクあいち 1201 中会議室
4. 内 容：

13:00 受付

13:30 開会の言葉（趣旨説明）

13:40 第一部（パネルディスカッション）

パネルディスカッション「大学・附属学校園共同研究の課題と可能性」

① 附属学校園登壇者（1～2 名）

② 公立学校教員登壇者（1 名）

③ 愛教大教員登壇者（1 名）

※ 登壇者の発表一人 15 分程度（60 分）＋質疑応答と議論（30 分）

15:10 休憩

15:30 第二部（ワークショップ）

・ 地区あるいは学校種のテーブルに分かれての議論（30 分）

- 附属学校園や公立学校が扱いたい研究課題

- 大学・附属共同研究体制の下での「教員研修機能」の課題

- 大学・附属共同研究体制における新たな研究課題（特に、汎用性
のある研究テーマ） 等々

・ 各テーブルの議論の発表と整理（30 分）

・ 全体討議（20 分）

16:50 閉会の言葉

17:00 閉会

なお、上記は 7 月下旬時点での計画です。今後、計画は変更されることがありますが、会場の予約や予算確保はできておりますので、附属学校園関係者及び大学・附属共同研究体制に興味をお持ちの方々は、「12 月 9 日にウィンクあいち」にお越し下さいますよう、お願い申し上げます。

計画の詳細については、今後のアナウンスをお待ち下さい。

趣意書では、研究会で議論する内容を、以下の 3 点に絞ることにした。これらは、先ずもって附属学校園や公立学校が抱える（扱いたいと思っている/扱って欲しい）課題につ

いて、更には、先に述べた有識者会議が取り上げている課題について現状の大学・附属学校園共同研究体制はどのように対応できるかについて、意見聴取したいという運営側の期待があったからである。

- (1) 附属学校園と公立学校が抱える（今後扱いたい）研究課題。特に、両者の共通課題と個別課題について。
 - (2) 現行の大学・附属共同研究体制を踏まえた各附属学校園における「教員研修機能」の現状と課題について。
 - (3) 大学・附属共同研究体制が果たしうる役割と研究課題の新たな方向性。特に、附属学校教員を含む地域の現職教員の指導力向上と公立学校に向けた汎用性のある研究テーマについて。
-

なお、研究会の開催は、当初から12月初旬を予定していた。学外からの参加者の多くは学校教員であることから12月の開催は懸念されたが、教科教育学研究部門において研究を進めたり、パネルディスカッションで登壇者を募ったりする関係上、開催時期はできるだけ後ろにずらしたいという判断があった。一方で、1月～3月にかけては大学入試が続くことから、平成30年内に開催せざるを得ず、結果的に12月開催という判断になった次第である。また、12月9日（日）の午後という開催日時の決定は、会場予約の制約から来ている。名古屋・岡崎両地区からの交通の便を考えた場合、会場は名古屋駅周辺か金山駅周辺が便利であるが、予算の関係上、ウインクあいちが好適と判断し、ウインクあいちの100名前後の会場の予約状況から、上記の日時に決定した。

2. 登壇者の決定と広報用ポスター・チラシの作成

7月末に趣意書が作成され、次にすべきは、第一部の登壇者の決定であった。

大学教員登壇者は、教科教育学研究部門例会で真島聖子先生に決定し、発表内容についても、特徴的な附属の研究・運営体制等の紹介を中心にするよう依頼した。附属学校からの登壇者は、名古屋・岡崎の両地区からご登壇頂こうということで、附属名古屋小学校研究部部長の橋本浩司先生（体育）と附属岡崎中学校副校長の鈴木佳樹先生（数学）に依頼し、ご快諾頂いた。公立学校からの登壇者は、丹藤博文先生から教職大学院修了者でもある本田敏倫先生（国語）をご紹介頂き、こちらもご快諾を頂いた。

登壇者の決定は9月中に終了したため、広報用のポスターとチラシを作成することにした。ポスターに関しては、大学と附属学校に掲示し、チラシについては秋の附属学校園の研究発表会の受付に置いて頂くと共に、県内公立小中学校にも配布した。ポスターとチラシのそれぞれは、下記の通りである。

このたび、愛知教育大学では、
新たな大学・附属学校園共同研究に関して、
その在り方や今後の方向性を探るための
研究会を開催します。
附属学校園・公立学校・大学のそれぞれの立場からの
登壇者によるパネルディスカッションの後、
参加者も交えたワークショップを行います。
大学・附属学校との連携の在り方や
可能性について一緒に考えてみませんか？
大学・附属学校園に関心のある方、
どなたでも大歓迎です。

2018年

12/9 日

13:30～17:00 (受付 13:00～)

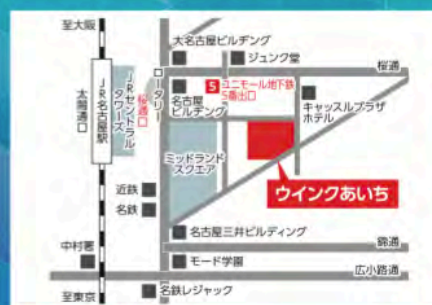
会場／ウイングあいち
1201 中会議室

大学・附属学校園 共同研究の 課題と可能性

プログラム

13:30 — 13:40	開会の挨拶
13:40 — 15:10	【第一部】 パネルディスカッション 「大学・附属学校園共同研究の課題と可能性」 登壇者 ① 橋本浩司先生 (附属名古屋小学校研究部長) ② 鈴木佳樹先生 (附属岡崎中学校副校長) ③ 本田敏倫先生 (豊明市立百穂中学校教頭) ④ 真島聖子先生 (愛知教育大学准教授)
	休憩 (20分)
15:30 — 16:50	【第二部】 ワークショップ形式によるディスカッション
16:50 — 17:00	閉会の挨拶

申込不要・入場無料



住所 / 名古屋市中村区名駅4-4-38
 ■JR名古屋駅南口からミッドランドスクエア方面徒歩5分
 ■ユニモール地下鉄5番出口徒歩2分

〈研究会の詳細はこちらから〉

愛知教育大学 教職キャリアセンターWebページ
 キャリア開発領域 教科教育学研究部門
https://www.aichi-edu.ac.jp/kyo-car/kyoiku/news/kyoiku_181209.html



国立大学法人
愛知教育大学

〒448-8542
愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

お問い合わせ先

愛知教育大学 企画課 教育企画室
 TEL: 0566-26-2717 FAX: 0566-95-0035
 E-mail: kyoiku-kikaku@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

大学・附属学校園 共同研究の課題と可能性

このたび、愛知教育大学では、新たな大学・附属学校園共同研究に関して、その在り方や今後の方向性を探るための研究会を開催します。

附属学校園・公立学校・大学のそれぞれの立場からの登壇者によるパネルディスカッションの後、参加者も交えたワークショップを行います。大学・附属学校との連携の在り方や可能性について一緒に考えてみませんか？

大学・附属学校園に関心のある方、どなたでも大歓迎です。

日時 2018年
12月9日 日 13:30～17:00
(受付:13:00～)

会場 ウィンクあいち 1201 中会議室
※交通アクセス、地図は裏面をご覧ください。

申込不要
入場無料

プログラム

13:30～13:40	開会の挨拶
13:40～15:10	【第一部】 パネルディスカッション 「大学・附属学校園共同研究の課題と可能性」 登壇者 ① 橋本浩司先生（附属名古屋小学校研究部長） ② 鈴木佳樹先生（附属岡崎中学校副校長） ③ 本田敏倫先生（豊明市立沓掛中学校教諭） ④ 真島聖子先生（愛知教育大学准教授）
	休憩（20分）
15:30～16:50	【第二部】 ワorkshop形式によるディスカッション ・地区・学校種・テーマに分かれての議論（30分） ・各テーブルの議論の発表と整理（30分） ・全体討議（20分）
16:50～17:00	閉会の挨拶

研究会の
詳細はこちらから

■ 愛知教育大学 教職キャリアセンターWebページ
キャリア開発領域 教科教育学研究部門

https://www.aichi-edu.ac.jp/kyo-car/kyoiku/news/kyoiku_181209.html



国立大学法人
愛知教育大学
AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

お問い合わせ先

愛知教育大学 企画課 教育企画室

TEL: 0566-26-2717 FAX: 0566-95-0035

E-mail: kyoiku-kikaku@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

チラシ（表面）

趣 意

「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて：国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書」（平成29年8月29日）にもある通り、附属学校の存在意義・役割・特色の明確化が求められるようになっていきます。附属学校の存在意義・役割・特色は各学校園の研究にこそ集約・実現されています。しかし、有識者会議の言う地域に開かれた学校や公立学校にとっても有効な汎用性のある研究等を具体化することは容易なことではありません。各学校は、それぞれ手探りで検討しているのが実態であります。

こうした現状に鑑み、愛知教育大学 教職キャリアセンター・教科教育学研究部門では、本年度のテーマを「附属学校との新たな共同研究」とし、各附属学校園の研究の一翼を担う大学・附属共同研究の新しい形を模索していくこととなりました。附属学校園における新たな研究の姿を検討する作業は、各附属学校園に任せきりにされるものでもなく、むしろ、大学の研究者と一体となって進められる必要があります。また、各附属学校園が孤立するのではなく、他の附属学校との交流により、相互に実態を共有することも重要であります。さらに、公立学校に向けた汎用性のある研究を模索するためには、公立学校の意見を取り入れていくことも欠かせないでしょう。

こうした幾つかの要求の存在を背景にしつつ、新たな大学・附属学校園共同研究に関して情報を共有し、その在り方の今後の方向性を探るため、研究会の開催を計画することにしました。具体的には、附属学校園・公立学校・大学のそれぞれから登壇者を募り、以下の3点について議論し、今後の大学・附属学校共同研究の課題と方向性を探ることが目標であります。

- (1) 附属学校園と公立学校が抱える（今後扱いたい）研究課題。特に、両者の共通課題と個別課題について
- (2) 現行の大学・附属共同研究体制を踏まえた各附属学校園における「教員研修機能」の現状と課題について
- (3) 大学・附属共同研究体制が果たしうる役割と研究課題の新たな方向性。特に、附属学校教員を含む地域の現職教員の指導力向上と公立学校に向けた汎用性のある研究テーマについて

会場案内

**ウイंकあいち（愛知県産業労働センター）
1201 中会議室**

住所／名古屋市中村区名駅4-4-38

- ◆JR名古屋駅桜通口から
ミッドランドスクエア方面徒歩5分
- ◆ユニモール地下街5番出口徒歩2分



国立大学法人
愛知教育大学
AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION
〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

お問い合わせ先

愛知教育大学 企画課 教育企画室
TEL：0566-26-2717 FAX：0566-95-0035
E-mail：kyoiku-kikaku@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

チラシ（裏面）

3. 教科教育学研究部門第5回（11月）例会

12月9日の研究会の直前の11月28日に、教科教育学研究部門第5回（11月）例会が開催されたため、ここでは、学外のシンポジウム登壇者をお招きして、当日の打合せを行った。

打合せの内容は、研究会開催の背景及びシンポジウム登壇者に当日お話し頂く内容の共有であった。後者のシンポジウム登壇者のお話しの内容については、その発話記録を次章に掲載するため、本節では、前者に関して教科教育学研究部門部門長（山田篤史）が提示したスライドの抜粋を掲載しておくことにする。その主内容は、先述の平成29年8月29日有識者会議報告書における附属学校が抱える課題及びその課題の対応策（中期・早急）の紹介、更には、Good Practiceとして取り上げられた附属学校の改革事例の紹介である。

2018.11.28(Wed.)

附属学校園との新しい 共同研究に向けて

数学教育講座 山田篤史

本日の話題

1. 課題：有識者会議で語られる「附属学校の課題」と「対策」とは？
2. 現状：附属学校Good Practice
3. 12/9の研究会の準備

国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議報告書(H29.8.29)「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」において語られる国立大学附属学校についての課題

- ・ **在り方や役割の見直し**：地域のモデル校としての役割が期待されているが入学者選抜を経た児童・生徒の構成は妥当か？
- ・ **大学との連携**：大学によるガバナンスが機能していない，大学・教職大学院における教育・研究への貢献・協力が不十分，附属学校園での研究・実践の正かを把握し，教員養成カリキュラムの改善に繋がっていない
- ・ **地域との連携**：地域のニーズに沿った柔軟な動きや，多様な観点からの生徒指導・保護者対応等の対応力に欠ける面がある
- ・ **成果の還元**：附属学校の教員がかける膨大な労力と時間の割に，その研究成果が地域や全国で十分に生かされていない

国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議報告書(H29.8.29)「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」において語られる国立大学附属学校についての課題

課題に対する対応策

各大学は，附属学校の現在の規模や学校数等が適当かを検証するとともに，教育・研究の成果の還元方法やその効果の最大化のための入学者選考の方法等を検証し，第3期中期目標期間中に(H33年度末までに)一定の結論をまとめること

有識者会議報告書(H29.8.29)において語られる「課題に対する対応策」：中長期的な方針

① 存在意義、成果の提供先・活用方法の明確化

- ・ 学校毎の国立大学の附属学校としての存在意義や役割及び当該学校ならではの特色を明確化
- ・ 各大学の附属学校園全体としての存在意義・役割分担・特色を明確化
- ・ 教育・研究成果の提供先となる学校像の明確化

② 多様な選考方法

- ・ 附属学校本来の使命・役割に立ち返った多様な入学者選考の方法の実施
- ・ 内部進学の見直しの検討

③ 幅広い意味の「モデル」

- ・ 附属学校が先導的に取り組むことによって同様の動きや課題意識が地域に徐々に広がっていく「起点」「拠点」となるべき

有識者会議報告書(H29.8.29)において語られる「課題に対する対応策」：中長期的な方針

④ 大学によるガバナンス

- ・ 大学が附属学校の教育委員会の役割を
- ・ 大学と附属学校の日常的な関係の構築や交流の強化の徹底
- ・ 各附属学校を評価する評価委員会の設置

⑤ 教員研修に貢献する学校への機能強化

- ・ 教育実習校としての役割だけでなく教職生活全体を見据えた教育研修に貢献する学校への機能強化
- ・ 公立学校の現職教員のための日常的な研修の場（例えば、日頃の授業の様子をいつでも見られる、公立学校の短期研修の場）
- ・ 附属学校を拠点として教職大学院修了者・大学の実務家教員を確実に輩出するサイクルを作るべき
- ・ 教職大学委との一体性を強化するべき
- ・ 公私立学校園・他大学の附属学校等との人事交流を進め、附属学校教員の視野の拡大を

有識者会議報告書(H29.8.29)において語られる「課題に対する対応策」：早急な対応

① 校長の常勤化

② 教員の働き方改革のモデル提示

- ・ 業務改善に関する好事例を蓄積し、その効果や具体的な取組方法等のモデルをエビデンスに基づいてわかりやすく全国の学校に示すこと

③ 地域住民等の参画を含む学校運営の改革

- ・ 学校運営に保護者・地域住民・教育委員会関係者等の参画を得る仕組みの導入
- ・ 公平に入学者選考を受けられる募集方法に改善すること等を通じて、地域や時代のニーズに合った学校運営を行う仕組みを可能とする体制に早急に改めよ

有識者会議報告書(H29.8.29)において語られる「課題に対する対応策」：早急な対応

④ 成果の追跡と深化

- ・ 研究成果が教育委員会・公立学校等でどの程度活用されているかの把握
- ・ 研究成果の提供・還元の具体的な効果を測れる方法の工夫
- ・ 授業実践研究等の取組を、学校所在地のみならず、地域・全国協議会等の場を活用して共有し、その性を広く社会に還元せよ

⑤ 特色等の明確化のための仕組み

- ・ 各附属学校の存在意義、成果の還元状況、公私立学校にはない付加価値、全国に発信できる特色等を客観的エビデンスをもって示す資料を作成することが期待されている
- ・ 附属学校を設置する大学は、全学校園を見渡した附属学校全体の存在意義や各学校に求めるミッション、役割分担等をまとめた資料を作成・更新すべき

+ ○ 「入学者の選考 - 教育・研究 - 成果の還元」の有機的なつながりの明確化

国立大学附属学校の新たな活用方策等(平成21年3月)

現状と課題

◎組織運営上の現状と課題

- 学長のリーダーシップによるマネジメント機能の発揮が不十分。
- 大学・学部教員の附属学校への教育活動への関わりが希薄。
- 地域教育界の意向が附属学校の研究活動に十分に反映されていない。

◎業務運営上の現状と課題

- 大学・学部における教育に関する研究への協力については、大学・学部の研究方針に基づくものではなく、附属学校が独自の立場で取り組んでいるものがほとんどである。
- 教育実習においても、附属学校に任せきりになり、大学・学部の側が責任を持って実施する体制になっていない。

改善方策

1. 附属学校の存在意義の明確化

- ①「**国の拠点校**」…大学・学部の持つ人的資源を活用しつつ、公立学校で実施するものとは異なる先導的・実験的な取り組みを中長期的視点から実施する。
- ②「**地域のモデル校**」…地域教育界との連携協力の下に、地域の教育のモデル校として、地域の教員の資質・能力の向上、教育活動の推進に寄与する。

2. 組織運営上の改善

- ①学内マネジメント体制の確立
(附属学校運営会議(仮称)の設置)
- ②地域に開かれた運営体制
(地域運営協議会(仮称)の設置、公立学校との人事交流に関する基本方針の策定)

3. 業務運営上の改善

- ①「国の拠点校」としての育成
(研究開発学校制度等の活用、文部科学省(初等中等教育局)等との連携、附属学校の全国共同利用化、「理数教育支援センター(仮称)」との連携)
- ②「地域のモデル校」としての育成
(地域の教育委員会との連携、現職教員の研修カリキュラムの開発、附属学校の免許更新講習の場としての活用)
- ③全国規模の研究協議会の開催による地域を越えた普及・啓発

新たな活用方策

初等中等教育政策推進への貢献

- 外国人子弟等の積極的な受け入れによる教育の在り方の調査研究
- 理数教育など優先的な教育課題に応じた先導的な指導方法等の開発
- 学校の組織のマネジメント・人材育成の調査研究
- 異学校種間の接続教育や一貫教育の調査研究
- 特別支援教育への寄与
- 児童生徒の勤労観、職業観を育てるためのキャリア教育の推進

さらに

各国立大学による対応

◆各国立大学は、第二期中期目標・中期計画の策定において、本とりまとめを参考とし、附属学校の改善方策、活用方策を積極的に検討していく。

附属学校管理運営上の課題

- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| ①良家の子女を集め、特権意識が強い？ | ②地域社会との関わりが薄い？ |
| ③進学校化、エリート校化している？ | ④学校評価が機能しておらず、改革・改善が進まない？ |
| ⑤公教育のモデルとしての役割を果たそうとする意識が低い？ | ⑥地域課題や実際のニーズに直接的に応えていない？ |
| ⑦大学との連携意識が弱く、独立している？ | ⑧閉鎖的で、新しい教員が声を出しにくい？ |
| ⑨人事交流の不足により、柔軟性や社会性が欠如している？ | ⑩各教員の自分意識が高く、学校運営が難しい？ |
| ⑪校長が、管理職としてのリーダーシップを発揮できていない？ | ⑫外部主催の生徒指導等研修会への参加が少ない？ |
| ⑬危機管理意識が低く、事案が発生した時の対応が遅い？ | ⑭人事管理や財務管理が甘い？ |
- など

附属学校の意識改革・体質改善＋大学の強いリーダーシップ

「国の教育拠点校」、「地域の公教育モデル校」

→国・地域・大学から必要とされる存在

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ● 地域に開かれた教育課程 ● 大学の知見、研究成果の活用 ● 新たな教育課題への対応 ● 外部人材とのつながり強化 | <ul style="list-style-type: none"> ● 付加価値の高い教育実習 ● 独自の先進的な取り組み ● 一般化された成果の継続的提示 ● 安定した学校運営 <p style="text-align: right;">など</p> |
|---|---|

附属学校Good Practice

東京学芸 附属学校運営部の機能強化による大学と附属学校の一体的な運営の促進等

新潟大 変形労働時間の採用と部活動対応

金沢大 附属学校園長の専任制（常勤化）と公募及び附属学校統括部長の新設

島根大 校長の常勤化、働き方改革(学校行事・研究会等の見直し、部活動数削減)

愛媛大 附属・大学の連携による特別支援体制の概要

高知大 専門家との連携による特別支援学校における就労支援の重点化

長崎大 学部、大学、附属学校、県教育センターの連携

大分大 校園長の常勤化・子供と向き合う時間を生み出すスクラップ&スリム

(7) 附属学校について

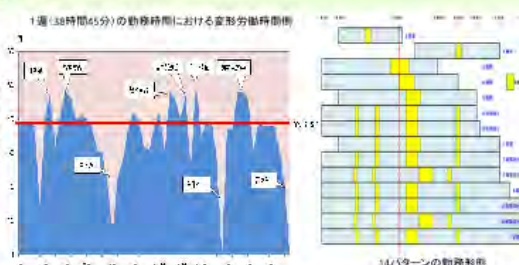
【東京学芸大学】附属学校運営部の機能強化による大学と附属学校の一体的な運営の推進等

- ・平成29年4月から附属学校運営部の体制を拡充し、事務組織の附属学校課を一体とする組織とした。教育委員経験者や専任の附属学校運営部長として置き、附属学校改革プログラムを策定し推進している。また、新たに公立小学校校長経験者や附属学校管理職経験者を専任の運営参事等として配置し、附属高校校長や附属国際中等教育学校長を常駐するとともに附属高校校長の半数教員を3名体制に増員すると附属学校の支援体制を強化した。
- ・社会的・経済的に困難な状況にある子供にかける「学習支援」「放課後支援」「チームアップフロー」等の効果的な支援の在り方を研究開発するとともに、学生が「教育支援体制」を確めたものカリキュラム開発を行い、支援と養育の取組みを一体化させるシステムを策定した。また、公立小学校に在籍する支援児童が附属中学校へ入学する仕組みを実施している（平成30年4月に4名入学）。



【新潟大学】変形労働時間の採用と部活動対応

- ・新潟大学附属学校園では、法人化を契機に、平成16年度から変形労働時間を導入している（14/パターン）。導入により、一日の勤務時間を柔軟に設定することが可能となり、教育実習、学校行事、部活動などの繁忙期でも勤務時間内で対応できるよう一日又は一週間の勤務時間を通常より長くする期間を設ける一方、進捗した勤務時間に相当する時間を削減するため、夏休み・冬休みなどの閑散期に短時間勤務日や連続した休日を増やすなど、教員にしっかり休養の取れる体制を整備している。
- ・附属長岡中学校では、平成29年度から部活動を教員の勤務時間内の活動とし、部活動以外の時間には保護者の協力を得て保護者会による「クラブ活動」として実施し、教員の負担軽減に努めている。



(7) 附属学校について

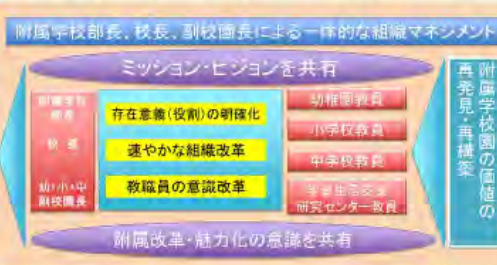
【金沢大学】附属学校園長の専任制（常勤化）と公募及び附属学校統括長の新設

- ・附属学校園長の専任制（常勤化）と公募制導入
大学教員が兼務していた学校園長を「専任」（常勤）として採用・配置することを平成29年度に決定。さらにその職責を担うにふさわしい資質を備えた人材を確保するため、全国に広く公募し選考した。
- ・附属学校統括長の新設
附属学校園長を統括するとともに、学校教育学類や教職大学院との連携の下、大学（法人）として附属学校園改革を進める際の要となる役職の「附属学校統括長」を平成30年4月に新設した。
- ・附属学校運営協議会の新設
「附属学校統括長」の新設と併せ、大学（法人）による附属学校園全体の有機的な繋がりをもちたガバナンス強化のため、理事、附属学校統括長、各校園長らを構成員とし、附属学校の将来構想、学校教育学類や教職大学院との連携等に関する事項を審議する「附属学校運営協議会」を新設した。



【島根大学】校長の常勤化、働き方改革（学校行事・研究会等の見直し、部活動数削減）

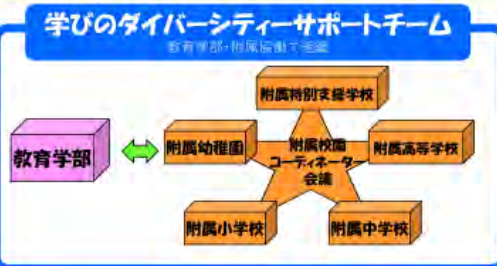
- 【校長の常勤化】
平成20年度から県教委との人事交流による校長（附属幼・小・中）を1名配置している。
- ・附属学校部体制をとることにより、附属学校部長、校長、幼・小・中の副校長による一体的な組織運営のマネジメントが機能している。
- 【働き方の改革】
・学校行事の見直しや部活動の削減を行った。公開研究会・研究紀要の定期開催・発行を廃止し、実践事例などのHP上での公開（平成29年度公開件数2,800件）や新たな教科毎の研修会（下記参照）を企画している。
- 【教員研修機能の強化】
・学部教員と協働した定期的な教科毎の研修会の開催（平成30年度26回計画）や附属学校を活用した県の初任者研修会の開催など、地域の教員研修機能の強化に貢献している。



(7) 附属学校について

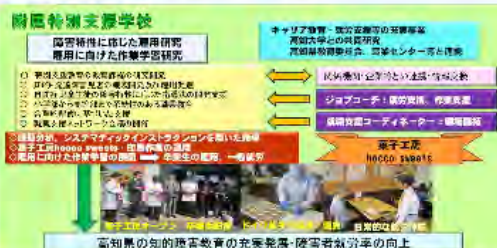
【愛媛大学】附属・大学の連携による特別支援体制の概要

- ・附属幼・小・中・高に在籍する特別な教育的ニーズがある子供への特別支援教育の推進、合理的配慮の提供及び附属5校園におけるインクルーシブ教育システムの推進に取り組んでいる。特別支援学校がその中核となり附属校園コーディネーター会議を組織し、各校園での支援や移行支援の充実を図っている。
- ・これらの取組を効果的なものとするために、教育学部と連携し学部・附属校園による学びのダイバーシティサポートチームを組織している。このチームに参画する大学教員が、附属教員や保護者・本人と学びの目標の策定や目標達成のための手段である合理的配慮や支援の手立ての立案に専門的な立場から参画している。
- ・このチームのサポートを受けながら各校園で作成した個別の指導計画・教育支援計画を実施し、その効果の検証を行っている。その際、可能な限り対象の子供と評価を行っている。



【高知大学】専門家との連携による特別支援学校における就労支援の重点化

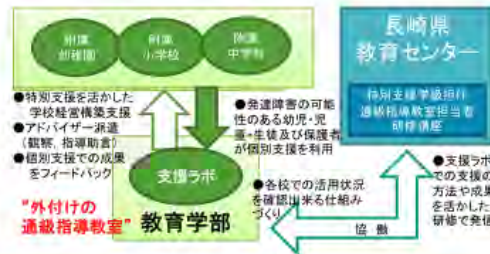
- ・背景として、特別支援学校では、平成20年度の入試改革（選考形式→抽選方式）の結果、一般就労（民間企業等への就職）の率が大幅に低下（平成22～24年度：38%）するなどの問題を有していた。
- ・対策として、文部科学省「キャリア教育・就労支援等の充実事業」の支援などを通じて、ジョブコーチ・就職支援コーディネーターの配置等、一般就労率の向上も含めた卒業生の就労支援を強化してきた。
- ・就職支援コーディネーターは、一般企業を中心とした職場開拓や福祉就労先である福祉事務所等での実習支援を行っている。ジョブコーチは、職務分析等を通じて卒業生個々に対応した手順書づくり等の支援や卒業生の職務範囲拡大（菓子工房での食品加工・商品開発など）に関する取組を行っている。
- ・以上のような取組の結果、一般就労の比率が67%（平成28年度）に達するとともに、平成26～28年度には福祉就労も含め卒業生の希望する先への就労率が100%となった。



(7) 附属学校について

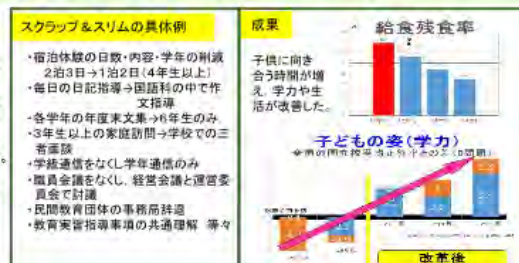
【長崎大学】学部、大学、附属学校、県教育センターの連携

- ・インクルーシブ教育システムの推進を附属学校の重点課題として、発達障害の可能性のある幼児・児童・生徒への支援システム構築と実践を、学部・大学院と附属学校が協働して実施している。文部科学省委託事業費に採択され、教育学部に“外付けの通級指導教室”をコンセプトとした『教育学部支援ラボ』を設置した。
- ・支援ラボからは、専門性の高いアドバイザーを派遣して子供の観察、教員への指導助言、教科指導法の共同開発や個別的教育支援計画の実質化、校内委員会への参画など、コンサルテーション型支援を実施している。
- ・支援ラボにおいては、子供及び保護者が週1回程度の個別支援（学習支援、行動問題解決、情動調整など）を利用し、成果を上げている。
- ・県教育センターの研修講座において、本研究・実践内容を中心に研修講座を協働的に構成し、成果を発信している。また教育学部として、各学校で活用状況の確認出来る仕組み作りを行っている。



【大分大学】校園長の常勤化・子供と向き合う時間を生み出すスクラップ&スリム

- ・附属小学校は、7時以前には出勤しない・19時には退庁すると勤務時間に制限を設定し、タイムカードにより管理している。また、土日祝日は出勤禁止である。また、業務の見直しを選択と集中の観点で50項目以上行い、教員の子供に向き合う時間を確保した。それらの取組を、全附属「これからの附属学校の在り方を考える協議会」で発表した。また、読売新聞社より働き方改革の取組について取材を受け、平成30年1月17日付け読売新聞「教育ルネサンス」に取組が掲載された。
- ・平成27年度より、大分県教育委員会との人事交流により校園長が派遣されるようになり、常勤化を実現している。校園長の常勤化と同時に、平成27年度より、附属学校園連携統括長が設置され、大学・学部と附属学校園との連携推進の役割を果たすようになった。



12月9日研究会へ向けての準備

趣意書における論点

- (1) 附属学校園と公立学校が抱える（今後扱いたい）研究課題。特に、両者の共通課題と個別課題について。
- (2) 現行の大学・附属共同研究体制を踏まえた各附属学校園における「教員研修機能」の現状と課題について。
- (3) 大学・附属共同研究体制が果たしうる役割と研究課題の新たな方向性。特に、附属学校教員を含む地域の現職教員の指導力向上と公立学校に向けた汎用性のある研究テーマについて。

4. 研究会当日の概要

趣意書・ポスター・チラシにある通り，研究会本体は2019年12月9日（日）の13時30分から17時まで，ウイंकあいち1201中会議室で開催された。

参加者は総計80名で，内訳は次の通りであった。会場の定員は108名が上限であり前方はシンポジウム用の登壇席にしたため，会場はほぼ満員の状態になった。

〔大学〕	○役員	2名	
	○大学教員	25名	
	○学生	10名	
	○事務	2名	（小計 39名）
〔附属学校園〕	○附属幼稚園	3名	
	○附名小	14名	
	○附名中	4名	
	○附岡小	3名	
	○附岡中	3名	
	○附属特支	3名	
	○附属高校	2名	（小計 32名）
	○一般	9名	（小計 9名）
合計		80名	

実際の研究会では，第一部が遅延し，第二部の時間も確保したため，最後のまとめは十分できなかった。特に，第一部では，フロアを交えて議論する時間が十分に取れず，質問についても1件しか受け付けられなかった。これらの詳細については，第2・3章をそれぞれ参照して頂きたい。

そうした時間配分のミスに加えて，司会者（山田）がアンケート回収のアナウンスをするのを失念し（実際，記入時間は無かったのだが），回収されたアンケートは2件に留まった。アンケートについては，非常に率直かつ有意義なご意見であるので，2件とも下記に全文を掲載させて頂くことにする（記述内容の理解には第2・3章を適宜参照のこと）。短い時間ながらアンケートを記入して，ご意見をお寄せ頂いた方には，この場を借りて感謝いたします。

1. 第一部についてのご意見・ご感想

- ・ 有意義ではあったが，わかり切っていることがらやキレイごとを省いて，もっとシビアに問題に迫って欲しかった。

- ・ 各々の機関が、自分たちの機関内からは動く気が無く、相手から見に来させたり、何をやってくれと言ったりと、歩み寄りが無いのだなというのが素直な感想です。それぞれの附属小中も公立学校も、お互いに認識が食い違っていることを自覚することから始めなければならないのではないのでしょうか。各々の機関で協力して課題を解決していくには、お互いがもっと相手の実情を知り、相手の意見を聞くべきだと思います。それぞれの主張が現状ではただただぶつかっている印象を受けました。譲歩すべき点も各々あるかと思います。これから更に働き方改革は進みますし、時間の制約は厳しくなっていきます。子どものために時間を費やすことは教師であれば当然です。ですが、その文言を盾に、教師の多忙化が改善されないままでは、これまでの課題は解消されないままです。折角、これだけの機関が揃っているのであれば、分業による多忙化の解消は可能ではないのでしょうか。そのための連携の姿勢を、我々は一丸となり形成していくべきだと考えます。

2. 第二部についてのご意見・ご感想

- ・ 楽しく話し合うことができた。
- ・ アーカイブの試用など、様々な方法が出ており、お互いに協力することで、より良い状況を作り上げたいという姿勢は同じだなと思いました。やはり機会を設けることは大切でした。特に、大学を活用してくれという意識が強いように感じました。現場も大学を使いたいという要望は出ており、共同研究への熱も大いにあるかと思います。しかし、それをかなえるような手段が薄いという現状がありました。物理的な距離というのは、各々のグループでも出ていましたし、配信というのは多忙化解消にも繋がると思うので、是非実現するとよいのではないのでしょうか。

3. 今後の大学・附属共同研究体制についてのご意見

- ・ 予算削減で縛られていては、何もできない。
- ・ 大学と附属の物理的な距離が精神的な距離にというのは、大変納得させられました。お互いが近づくということを求めているながらも、機会に恵まれず、相手からこちらに来て欲しいというばかりでは、現状は改善しないかと思います。お互いが出向くというのが大切かと思いました。

4. 本研究会の運営に関するご意見・ご感想

- ・ 大学、附属、公立間の交流がないことが最大の問題でもあるので、このような会が新たなスタートとなって欲しい。

文献

国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議(2017. 8. 29).

「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて：国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書」．文部科学省．

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/077/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/08/30/1394996_001_1.pdf)

(文責 山田篤史)

第2章：研究会第一部のまとめ

本章では、第一部のパネルディスカッションの発話記録を掲載する。

登壇者は、前章でも述べた通り以下の4名の先生にお願いした。ご登壇の順序も以下の通りである。

- (1) 橋本浩司先生（附属名古屋小学校研究部部長）
- (2) 鈴木佳樹先生（附属岡崎中学校副校長）
- (3) 本田敏倫先生（豊明市立沓掛中学校教諭）
- (4) 真島聖子先生（愛知教育大学准教授）

なお、主催者側は、登壇者陣の地区・校種・教科のバランスは考慮したが、当然ながら、各先生のご発言の内容は各所属を代表するものではなく、あくまで個人的な意見であることは申し添えておきたい。

【冒頭部】=====

山田部門長：始めたいと思います。私、愛知教育大学の教職キャリアセンターの教科教育学研究部門の部門長を仰せつかっております、山田と申します。専門は数学教育です。本日は、休日にもかかわらず、殆ど座りきれないくらいご参加頂きまして、誠にありがとうございます。主催者側としても、非常に感謝しております。

今日は、「大学と附属学校園との共同研究の課題と可能性」と銘打ちまして、みなさん方にご意見を伺ったり、我々としても色々と考えたりするために、皆さんにその材料を頂きたいと思いまして、こうしたテーマで研究会を催すことになりました。

まずは、開会に先立ちまして、学長先生に来ていただいておりますので、一言ご挨拶を頂こうかと思っております。先生よろしくお願いいたします。

後藤学長：今、山田先生からもご挨拶ありましたけれど、日曜日、しかも午後のこの時間においでになると、ほぼほぼ一日つぶれてしまう中でお集まりいただきまして、ありがとうございます。この教科教育の先生方と附属との共同研究会というのは歴史を持っていて、研究冊子を出すなど、色々なことを大学としては行ってきました。

しかし、有識者会議以降、附属の有り様が問われることになった流れの中で、本学の教科教育学の先生方が、少し足元を見直していきたいということで、学長裁量経費の方でこういうことをやりたいという風に申請してきました。ただ、正直申しまし

て、計画の当初予算や内容については結構うるさいことを申しまして、少し削らせていただきました。そうした流れがあるものですから、なおのこと、本日はお邪魔させていただいた次第です。

附属はですね、よい面もあるのですが、色々な課題を抱えていまして、例えば労基が入るような問題、働き方改革ということで、今日鈴木先生の方で、お話があるかとは思いますが、まあなんというのでしょうか、対応に追われてきています。一般的な大学の附属と同じで、交流人事でそれなりに教育委員会から選ばれし優秀な先生方が来て下さっておりますので、やる気があるとそれが結果的に働きすぎになっていると、そういう状況があるのですね。しかし、時間管理をしていては、やりたいことがやれなくなるという現状があります。

その一方で、大学はこれから実践力をより高めていくため、高度化に向けて、教職大学院の拡充に着手していきます。附属は単なる教育研究ということではなくて、なんとしても教職大学院のフィールドとしても活躍していただきたいし、附属におられる方々は教職大学院を出ていただきたい。それで地域の中に戻って、確実にリーダーになっていただきたい。そういう思いを思っているところです。

またその一方で、少子化はこれから益々進んでいきますので、附属の規模については、目標値半減というくらいの勢いで進めていくということを、文科省を含めてですね、附属の関係の方々には宣言しているところです。ただ、一年でそうなる話ではありませんので、そういう計画を少子化に向けてどう設定していくかが、今、求められているところです。

様々な課題に向き合いながら取り組んでいるところですので、本日、シンポジストの皆さまのお話を参考にさせていただきたいと思っています。また、このような会を忙しいなか催してくれた教科教育の皆さんにも感謝し、改めてここにいらっしゃる先生方には一日、附属を中心としてですね、大学の学生の教育・研究に協力して頂いていますこと、最後になりましたが、お礼申し上げたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

山田部門長：どうもありがとうございました。それで、早速ですけども、本日のプログラムです。今後、第一部と第二部に分かれまして、第一部は、パネルディスカッションになります。既に前にお座りいただいている4人の先生と1時間半を目安にパネルディスカッションをいたしましょう。フロアの方の質問を受け付け、何か要望だとか、こういうことを議論してもらいたいということがありましたら、質問を受け付けるかもしれません。第二部は、皆さん方で教科だとか校種だとかのグループに分かれまして、新たな研究の可能性や、こういう課題があるのでは、とかということを洗い出してみるために、ワークショップ形式でディスカッションしてみましょう。

大まかなプログラムはこうなりますが（スライド1）、まずは本会全体と第一部の趣旨をご説明しておかないといけません。教科教育の人間は学内にも数多くいますから、それぞれ課題意識だとか、研究の方向性だとかはあるかもしれませんが、まず大

学の事情と言いますか、今学長先生が言われましたように、有識者会議というものがございまして。今日、帰られましたら、グーグルで「平成29年8月29日 有識者会議」と検索して頂きたいのですが、国立の教員養成系の学部・大学に課せられている課題、さらに、それにどのように対処しなさいということの報告書が出ております

(スライド2)。この中には、附属に対する課題等が、謂わば、外からどのように見られているかが、要望と共に出ております。国立大学の附属学校の「役割や在り方の見直し」をしてはどうですかとか、「地域との連携」をもう少し密に取って下さいとか、「大学との連携」の問題だとかがまとめられております。最後のものは、ガバナンスの強化ということで、下手をすると上から附属の先生に押し付けが来ることを想像されるかもしれません。ただ、我々としては、まずは独立の組織として地域に根差す形で研究をして頂くのはよいとしても、大学との連携でもう少し我々を使っていたきたいなという思いもあります。有識者会議報告書では、そうした地域等への「成果の還元」も指摘されておりますので、お家に帰られたら、是非見ていただけたらと思います。

プログラム	
13:30-13:40	開会の挨拶 (学長：後藤ひとみ先生)
13:40-15:10	【第一部】 パネルディスカッション
15:10-15:30	休憩
15:30-16:50	【第二部】 ワークショップ形式によるディスカッション
16:50-17:00	閉会の挨拶 (副学長：野田敦敬先生)

国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書(H29.8.29)「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」において語られる国立大学附属学校についての課題

- ・ **在り方や役割の見直し**：地域のモデル校としての役割が期待されているが入学者選抜を経た児童・生徒の構成は妥当か？
- ・ **地域との連携**：地域のニーズに沿った柔軟な動きや、多様な観点からの生徒指導・保護者対応等の対応力に欠ける面がある
- ・ **大学との連携**：大学によるガバナンスが機能していない、大学・教職大学院における教育・研究への貢献・協力が不十分、附属学校園での研究・実践の成果を把握し、教員養成カリキュラムの改善に繋げていない
- ・ **成果の還元**：附属学校の教員がかかる膨大な労力と時間の割に、その研究成果が地域や全国で十分に生かされていない

スライド1

スライド2

それと、個人的な懸念です。このようにまとめたのですが、授業研究です(スライド3)。「授業研究」というのは、英語の「寿司」「侍」と同じで、もう英語になっております。あえて英語にすると Lesson Study になるのですが、これは、我が国特有の職能成長の仕組み、あるいは実践的知見を蓄積していくための研究プロセス、方法論です。これに関して、附属の方で公開授業、授業研究をやりますと、例えば、目標設定と計画をすごく入念にされますし、最後に学びを整理し、それを蓄積し、次の計画につなげていくということも非常に熱心にされます。ところが、一般に「授業研究」と言いますと、研究授業とその検討会に焦点が当たりがちです。附属の研究会は、「目標設定・計画」に始まって、「研究授業」「授業検討会」を経て「学びの整理」に至って、次の「目標設定」に繋がるという、このプロセスをグルグル回して職能成長を高めていくという、こうしたシステムの拠点になっています。これが機能しなくなってしまうたらどうなるのだろう、というのが個人的懸念です。「授業

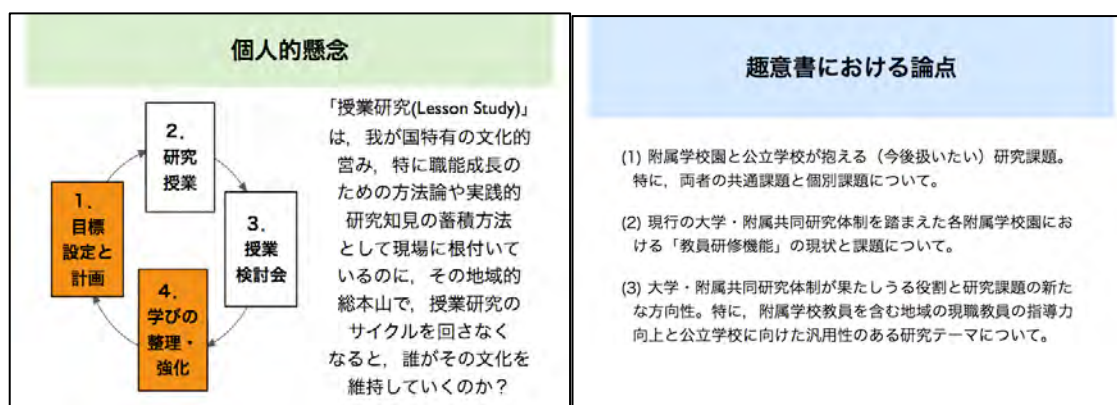
研究」は日本特有のシステムとして紹介され、世界で知られるようになったのに、日本で空洞化するということが起こりかねません。これよく言われることですが、授業研究に関する研究は、もう英語でやらなければならない時代なのです。授業研究を研究しに、日本語を学んで海外から学生などが来てくれるといいのですが、むしろ授業研究を学ぶために日本以外に研究しに行ってしまうということが起こっています。我々は、授業研究の拠点として、第一に「附属」を考えるわけですが、その研究が薄れていき、大学との連携も無いというのでは、授業研究が空洞化していくのではないかという個人的懸念があるのです。

それで、本来、論点は色々あるのですが、本学の教科教育研究部門では、一回目のことですからこういうことを議論してみましようということで、3つくらい本会趣意書に論点を掲げさせて頂きました（スライド4）。

先ず、附属学校園と公立学校が抱える、あるいは今後扱いたい研究課題です。

それから、現行の大学・附属共同研究体制を踏まえて、特に教員研修機能について何か新しい方法ないだろうか、あるいは、課題はないだろうかという点です。

最後に、重なるかもしれませんが、大学・附属共同研究体制が果たし得る役割と新たな研究課題の方向性です。ここには妄想が入ってもよいので、今後どのような共同研究していったらよいのか、特に、公立学校に向けた汎用性のある良い研究テーマはないだろうか、ということで挙げさせて頂きました。



スライド3

スライド4

一応、そうした論点を掲げた上でシンポジウムをしてみようということで、登壇者も決定させていただきました。登壇者は、まず附属名古屋小学校研究部長の橋本浩司先生。

橋本先生：よろしくお願いします。

山田部門長：それから、岡崎地区から、岡崎の附属中学校副校長の鈴木佳樹先生。

鈴木先生：よろしくお願いします。

山田部門長：それから、公立学校の方から、豊明市立沓掛中学校の本田敏倫先生。

本田先生：よろしくお願いします。

山田部門長：それから、大学代表として、愛知教育大学から真島聖子先生。

真島先生：お願いします。

山田部門長：司会は私、山田が務めることにいたします。ということで、まずは90分弱、4人の先生から、10分から15分くらいずつお話を頂いて、それをもとに、フロアの方から多少ご質問を受けつつ、どういうことが課題としてあるのだろうか、あるいは、どういうことが考えられるのだろうかということを論点整理できればと思います。最後のスピーカーは真島先生ですが、全国にも附属が多くあり、そこでグッドプラクティスと言われるものがあったり、あるいは特徴のある研究もあったりしますので、それらをご紹介して頂いて、少し議論してみようかと思います。

それでは早速ですけれども、橋本先生の方からよろしくお願いいたします。

【橋本先生】=====

橋本先生：みなさん、こんにちは。初めまして、という方もいると思います。愛知教育大学附属名古屋小学校で研究部長をしております、橋本浩司と言います。金曜日に体調を崩してしまい、こんな声ですが、よろしくお願いします。実はですね、この会のためにしっかり声を整えてこようと思っていたのですが、こんな声で昨日一時間点滴を打って参りました。今日はですね、尊敬している先輩の名古屋市教員組合の書記長さん、いつも勉強している公立学校の後輩まで来て頂けているということで、とても光栄です。ありがとうございます。

では、よろしくお願いします。大学・附属学校園共同研究の課題と可能性ということで、私の方にお誘いが来ましたので、私なりにお話しさせていただきます。上手く伝わるか分かりませんが、よろしくお願いします。

まずですね、この写真。校内の先生と加納先生が写っている写真ですが、この授業は何の授業か分かりますか。当然、生活科の授業を検討しているのかと。加納先生は生活科ですので。ですが実は違っていてですね、国語の授業の研究に加納先生も加わって頂いたという写真です。今年の夏に、校内で夏の検討会というのが行われて、その一枚の写真です。こちらはですね、家庭科の模擬授業のときに、大学から技術教育講座の磯部征尊先生に参加して頂いて調理実習をしているところです。また、これなのですが、もうこれが僕のこれからの附属学校の歩むべき姿かなと思っている写真でして、大学教員、附属学校の先生、公立小・中学校の先生、あと大学生、院生、教職大学院生が参加した、本校体育部主催による学習会の写真です。実はですね、今日、岡崎附属中学校の鈴木先生も来られていますが、この真ん中におられる方が、夏に講師をして頂いた附属岡崎中の馬場先生という方です。8月24日の夕方に行いまして、そのあと体育館に移動してみんなで記念写真を撮ったという写真です。

それですね、自分はこの「学びの共同体」というのをこれから大事にしていこうと思っています（スライド1）。そこには必ず、大学教員、附属学校園、公立小・中学校、大学生、院生、教職大学院生、全てを含めた学びの共同体というのが、これから附属学校が担うべき姿かなと思っています。本校の職員の構成ですが、先ほどありましたように、人事交流で来ております。附属名古屋小学校は、尾張地区、名古屋地区から20代～40代前半まで。自分はまだ4年目で40才ですけども、今のところ、教員の中では最年長となっております。また、自ら志願してという先生は殆どおりません。自分も、11月の終わりに校長先生より電話がかかってきて、「来年附属の話があるよ」ということで来ました。初めは、「何故附属に来てしまったのだろう」と毎日ベランダで泣いておりました。それはですね、この附属学校の使命があまりにもプレッシャーに感じてです。附属学校の使命の一番は、本校の教育の達成を図る。二番は、大学生の教育実地研究を指導する。教育実習ですね。三番は、教育の理論的・実践研究を行う。四番が、公立学校との教育技術の交流を行う（スライド2）。ということで、並々ならぬプレッシャーを感じながら、一年目は過ごしていました。

学びの共同体	附属学校の使命
 大学教員 附属学校園 公立小・中学校 大学生・院生・教職大学院生	 (1)本校の教育の達成を図る (2)大学生との教育実地研究を指導する (3)教育の理論的、実践研究を行う (4)公立学校との教育技術の交流を行う

スライド1

スライド2

それですね、附属学校の使命を果たそうとしますと、今日ここに附属名古屋小学校の仲間もいますが、どうしても労働時間が長くなってしまいます。担任業務、またはそのための行事となれば会議、そして資料も膨大です。今年来たある先生は、4月の一か月で、資料の枚数を調べたら450枚くらいあったと言っていました。資料が膨大で、とても目を通す時間もないと。そのような中で研究となると、とても時間が足りないという状況です。

また、三番の教育の理論的・実践的研究を行うという点です。平成29年度に再び労基が入りまして、それまでは教育研究発表協議会という名称で毎年春に開催しておりました。そのときに、まずは全校論・総論、そして各教科で理論を作っていきます。それを夏休みにかけて議論をしていきます。その後、一次検討会ということで、各教科を3つ4つのグループに分けて議論を行っていきます。次に、その検証授業を

グループで行い、紀要を作成し、それが終わると、次年度の教育研究発表協議会開催といったサイクルで行ってきました。これが第64回まで、こういうスタイルで行われてきました。

そこに、研究の在り方を見直しなさいと労基が入りまして、附属小学校も働き方改革という所です。それでは問題点は何かといいますと、研究に関しては、まず理論を考えることに必死になります。そのために、教科の中心者が一人選ばれ、その人が中心に理論を考えていきます。それで、理論を考えたら当然手立てができますので、手立てを教科内で統一してやっていこうとなります。そうなるそうですね、縛りが多すぎて、授業者の自由度があまりなくなってしまう。全ての、例えば体育なら体育で手立ては統一ということになると、どうしても苦しくなってきます。そのため、理論や紀要の作成が重視され、なかなか授業の本質的な内容までは十分検討やできないというのが実情でした。もちろん本質的な内容も議論しますが。

(3) 教育の理論的、実践研究を行う

平成29年度に再び労基が入るまでは・・・

研究発表協議会(毎年春開催)

全校論(総論)→各教科の理論(夏休み
にかけて、議論)→一次検討会(グループ)

→検証授業(冬)→紀要作成

→研究発表協議会(次年度)

研究の在り方を見直し

問題点

- 理論を考えることに必死
→教科中心者にしわ寄せ
- 教科内で統一の手だて
→縛りが多すぎ、授業者の自由度が・・・
- 理論や紀要の作成に重視
→授業の本質的な内容を検討できない

スライド3

スライド4

さらに、ここは公立学校の先生たちの壁といいますか、私の妻も公立学校で先生をしているのですが、「附属の研究をちょっと見に来ない」と言っても、「難しすぎて分からない」の一言です。一生懸命やっているにもかかわらず、何か難しい研究をしているイメージで、「日々の授業ではなかなか使えないのではないか」、または「附属学校だから子どもたちは頭がいいのでは?」「附属学校だからこんな授業ができるのでは?」と思われているところもあるのです(スライド5)。実際は、そうでもないのですが、それで、十分な発信がなされていないのではないかと考えました。

そして、今日、この会があるということで、牧野先生という附属の大ベテランの先輩の先生と一緒に食事をする機会がありまして、「先生、研究とは何ですか?」とお聞きしましたところ、一言、「自分磨き」だと(スライド6)。まさしくその通りだなと思いました。授業の質を高めていこうということで、これを職員の皆さんと共にということで、職員の意識改革として、授業を観に行きたいと思わせる授業、やってみたいと思わせる授業、教師自身も楽しいと思える授業、これを皆さんと共有

することができると、附属学校がもっともっと多くの人に足を運んでもらえる場になるのどと考えました。

公立学校の先生たちとの壁

問題点

- 難しい研究をしているイメージ
→ 日々の授業ではなかなか使えない
- 子どもたちは頭がよい
→ 附属学校だからこんな授業が...


充分な発信がされていない

スライド5

研究＝自分磨き 授業の質

職員の意識改革

- 授業を観に行きたいと思わせる授業
- やってみたいと思わせる授業
- 教師自身も楽しいと思える授業

スライド6

また、大学教員との連携というところでは、大学教員の校内研究会参加ということで附属名古屋小学校は、今年度から、研究会も校内だけではなくて大学の先生にも足を運んでいただこうということで、これまでに森勇示先生であったり、鈴木一成先生であったり、または縄田先生や上原先生、色々な先生に入っていました。そのことによって、研究会、本来どういう会議がなされているのかということを知ってもらいました。それと、大学教員の授業参観・参加が、今、結構頻繁に行われてきています。三つ目ですけども、理論ベースから実践ベースへということで、やはり本校の強みは授業者実践者ですので、授業を大切にやっていこうと。ただし、理論は後回しかというと、そうではなくて、実践を進めながら理論を構築していこうという考えです（スライド7・8）。大学教員の校内研究会参加がありますので、附属学校と大学教員の情報共有はあります。そして、附属学校の使命ですので、先進的な研究の考え、それに関しては大学との連携を強化していこうとしています。

大学教員との連携

研究の見直し

- 大学教員の校内研究会参加
- 大学教員の授業参観・参加
- 理論ベースから実践ベースへ

スライド7

大学教員の校内研究会参加

- ・ 附属学校との大学教員との共有
- ・ 先進的な研究の考え
- ・ 大学との連携強化

スライド8

大学教員の授業参観・参加は、体育特有の事情で申し訳ないのですが、「いついつに授業をしますので来てください」とメール一本で、来られたら来て頂けるという感

じになっています（スライド9）。そして、授業の意見交換をすることによって、授業の修正・改善を図っていこうという考えです。先ほど申しましたように、理論ベースから実践ベースへということで、一次検討会も理論面の文章を練るという形から、夏の検討会と名前を変えまして、先程の写真にありましたように模擬授業形式で行い、共同研究者である大学教員にも参加して頂き、それによって授業の本質を再検討したり、大学の共同研究者から考えを頂いたりして、教科の考え方の共有というものを図っていきました（スライド10）。

大学教員の授業参観・参加

- メール1本で
- 授業の意見交換
- 授業の修正、改善

スライド9

理論ベースから実践ベースへ 一次検討会→夏の検討会

- 模擬授業形式
- 共同研究者(大学教員)の参加
- 授業の本質
- 教科の考え方の共有

スライド10

今年度、秋の公開授業は、5日間設定しました。授業後にミニ協議会、そして授業づくりについての話し合い、そうしたことによって公立学校でもすぐに使える教材となり、今度の秋の公開授業では総数は150名ほど参加がありました（スライド11）。

研究紀要の在り方も、今年度から変えようとしています（スライド12）。研究紀要という言葉自体も問題だという意見もありますが、その名前を使うかどうかはさておき、まずは読んでもらわないと意味がないと考えています。これまでは文章中心でしたので、それを何とか読んでもらえるようにしようということで、「深い学びにつながる授業デザインによる授業づくり」をテーマにし、文字より写真がよいということで、「写真集」のようにして、色々な先生に読んでもらえるように、附属名古屋小学校から国を動かそうと、そういうような発想で、何かインパクトを与えられるような研究紀要になればと考えております。ただし、それを作るから労働時間が長くなるとかそういうわけではなく、楽しい授業をしたのだから、こうやってまとめると楽しいなど、そう思えるようなまとめ方をしようと思っています。

秋の公開授業(11月6、7、9、13、19日)

- ・ 公開日を設定(5日間)
- ・ 授業後、ミニ協議会
- ・ 授業づくりについての話し合い
- ・ 公立学校でもすぐに使える教材

研究紀要の在り方

- ・ 読んでもらわないと意味がない
- ・ 授業デザインによる授業づくり
- ・ 写真集(文字より写真)

スライド 11

スライド 12

また、これは来年度です。実践研究発表会という名前が来年から変わります。「深い学びにつながる授業デザイン」ということで、子どもも先生もワクワクする、つつい学びたくなる考えたくなる、仲間とともに。そういった授業をどうやって作っていかうかということ、で、「深い学びにつながる授業デザイン」という視点で、これまでの指導内容をもう一度見直し、構想・立案等、全てをどうデザインしていくかというところ、です。5月28日火曜日午前中開催です(スライド13)。内容としては、公開授業。今のところ、各教科で複数の授業を公開する予定です。その後、意見交換会、共同研究者のミニ講義も行う予定です。

さらにですね、これは公立学校の先生を交えた学習会ということ、で、平日の夜6時半から8時くらいまで。今年度実施したものを記しました(スライド14)。体育が多いですけど、これまでに第4回。ここに、先ほどの公立小・中学校の先生や附属学校、大学教員の参加がありました。一番はですね、公立の現場の先生で、研究会に入るのはちょっとねという方が沢山おられます。しかし、附属の学習会には行きたいという先生は沢山いるというのをちょっと耳に入れてですね。それでは、今できることは何かということ、で、無理のない範囲でこういう日を設定して実施しました。他に、学級経営・学級力学習会ということ、で、こちらには磯部征尊先生にお越しいただいて、そういう学習会をしました。学習会の案内については、ホームページによる情報宣伝を行っております。「お知らせ」のところに、本校「体育部主催による第5回学習会・体育学習実技講習会について」ということで、もうホームページにはアップしております。今後の予定ですが、体育の学習会が来月の1月25日金曜日です。理科の学習会も1月30日にありますし、これが少しずつ広まって、色々な所で学習会をすることによって、一番は、公立学校の先生たちが附属学校と身近になる、ということが大きいかなと思っております。

ありがとうございました。

名称変更

2019 愛知教育大学附属名古屋小学校 実践研究発表会

5月28日(火)午前中開催

- ・ 公開授業(各教科で複数公開)
- ・ 意見交換会
- ・ 共同研究者(大学教員)ミニ講義

公立学校の先生を交えた学習会:平日夜6時半~8時くらい

体育

第1回体育実技講習会(6月21日)	
内容:水泳運動、器械運動	参加:38名
第2回体育実技講習会(8月24日)	
内容:ゲートボール(戦術学習)	参加:29名
第3回体育実技講習会(10月11日)	
内容:ネット型ゲーム、陸上運動	参加:41名
第4回体育実技講習会(11月22日)	
内容:ゴール型ゲーム(2本)	参加:23名
学級経営・学級力学習会(9月21日)	
内容:学級経営、学級づくり	参加:36名

スライド 13

スライド 14

山田部門長: ありがとうございます。附属の先生にはですね、フロアに来られるみなさんが、どういう先生がお集まりになるか分かりませんでしたので、所謂各学校の事情も話していただこうというのもあってですね、お願いいたしました。

【鈴木先生】=====

山田部門長: 続きまして、鈴木先生。よろしくお願い致します。

鈴木先生: 附属岡崎中学校の鈴木でございます。パワーポイント等を用意しておりませんので、レジメに従って着座にて15分よろしくお願い致します。私は昨年度から、附属岡崎中学校でお世話になっております。平成8年から附属岡崎小学校でも学ばせていただきました。2度目の附属勤務ということで、こういう機会をいただいているのかなとも思うわけですが、あくまで発言は個人のものでございますので、附属岡崎中学校を背負っているものでもありませんし、附属学校全体を背負っているものでもありませんので、録画等もされておりますけれど、発信の際にはご配慮をお願いいたします。

冒頭、学長先生も触れておられましたけれども、今私たちには、働き方の見直しが声高に要求されております。12月7日の新聞に、12月6日の中教審特別部会の指針等が示されておりました。残業は月45時間以内、繁忙期には月100時間未満という目安が示され、変形労働制導入の検討、あるいは長期休業中に閉庁日を設定して休暇取得を促進することなどが提言として示されています。本校も働き方の見直しに、昨年度から取り組んでおります。本年度は、経験年数のバランスを考慮し、各学年から1人ずつ計3人に、主幹教諭を加えた4人でわくわく委員会、ワークとかけて本校清水教頭がネーミングしたわくわく委員会を立ち上げ、スクラップ&スリム&ビルドを合い言葉に、働き方の見直しをしています。ただ、文科省の動きには、スクラ

ップなきビルドではないかなというところをちょっと感じています。例えば、休暇取得促進するためにとすることで、研修の削減が言われるのですが、一方で、平成21年から教員免許更新制が導入されました。そもそもあれは文科省にとってはお金のいらない改革というとらえ方を私はしています。当時、総合教育センターに勤務していた関係で、教員免許更新制の周知に係る説明会に参加しました。学び続ける教師像には共感しましたが、制度化については非常に疑問を持ちながら聞いておりました。今回の新学習指導要領も、理念は素晴らしいと私は思っております。育むべき資質能力から議論を出発し、教科論に分化していく過程、今まではどちらかという総則は教科論を束ねたものというイメージに近かったのですが、やはり総則をきちんと議論したうえでの教科論に、非常に素晴らしい学習指導要領だなと思っています。その一方で、その結果何が起きたかっていうと、小学校では英語の時間が単純に増えただけですね。高学年の英語が教科化されるということは小中の人事異動がある愛知県では、中学校の先生を含めて研修の時間が増えることになります。道徳教科化についても、当然評価が加わりますので、それに対する研修が必要であると、いろいろと増えていく。足し算しかないんじゃないか。今回の改訂は、これまで三河の教育が大切にしてきた理念と合致するので、私は大歓迎なのですが、「子どものために」という正論だけで、「子どもの立場で」とか、「教職員の立場で」という視点の議論が抜け落ちたまま提言がされていないか、そこが非常に疑問に思っています。部活動の問題も同様です。チーム学校だといって外部指導者を入れるといいと言いますが、教員の指導時間を外部指導者に置き換えるだけで解決するのかというと、当然学校現場で活動が行われるのであれば、無関係ではられません。人材を探すことや、その人たちとの連絡調整も必要になります。指導時間に代わる負担が、精神的な負担を含めて増えるわけです。その視点が非常に抜け落ちてはいないかと考えています。もし部活動を働き方改革として整理するならば、もう社会体育に完全移行しなければ、できないのではないかな。学校教育と切り離さず決断が必要です。ただ、学習指導要領に示されている以上、そういう解決は難しいと思います。一教員がこんなことを思っても何も変わりません。私たちは与えられた中で何ができるか、「子どもたちのために」を、子どもたちの立場で、管理職であれば教職員の立場で、考えていくという視点が重要であると考えています。

そんな中、我が母校愛知教育大学では、チーム学校を見据えた学部編成が行われました。これは大変すばらしいことだなと思います。本当にチーム学校ということ考えたときに、今必要なのは、やはり臨床心理士の方、福祉の方、教育ガバナンスの関係、本当にこういう専門職がきちんと学校に配置されることで、子どもを幅広く見とる目が増えるのではないかなということで非常に期待をしています。

私たち附属学校園における働き方の見直しについて、大学からは、言い方は悪いですが、トップダウンで主に3つ指示がありました。1つはタイムカードの導入です。ちなみに、附属学校園では、月平均8時間、年96時間以内の超過勤務が認めら

れています。2つめの施設利用については、朝の7時から夜9時までという指示が出ています。3つめの研究の在り方の見直しについては、研究協議会の在り方も含めて見直すように指示がありました。トップダウンであると反発したくなるものなのですが、実際にタイムカードを導入してみると、それぞれの先生方のタイムマネジメント力の向上につながると感じています。今30代の職員が多いので、仕事の把握や優先順位の判断など、仕事を見直すとても良い機会をいただいたなと感じています。これは取り組んだからこそわかったことです。

研究の在り方の見直しについては、研究は誰のためのものかという問い直しから始めました。当然、良い授業がしたいという気持ちが研究の原点でありますので、研究協議会そのものを無くすという発想は一切ありませんでした。研究協議会を開くにあたっては、何が核で、何を残すべきで、何を削減していくことが、働き方の見直しになるのだろうか、負担軽減になるのだろうか、と考えたとき、授業提案をなくすということは、職員のモチベーションの低下につながります。子どもの期待を裏切ることにもなります。ある女生徒の話を紹介します。中学校選ぶときに2つの私立中学校と附属岡崎中学校を見にいった。で、その中で圧倒的に面白い授業をしていたのは附属中学校だったから私はここに來たんです、という生徒がいました。子どもたちは例外なく意思を持って入学してくる、不合格になるかもしれないというリスクをもって受験に臨むということはやはり覚悟がいることである、そういう子どもたちの期待を裏切ってはならないなと自戒しています。ある3年生は、「先生、今年の研究会はうちのクラスは1つしか発表がないんだよね」と残念がっている。これはびっくりしました、私も。だから、研究協議会の核は何かといったら、授業提案をすること、それに対して意見をいただくこと、つまり授業提案とその協議、この2つの核を外してはならないということです。

では、そのことを踏まえて持続可能な授業研究をどう進めていけばよいか。岡崎三校では今年度全て半日開催としました。新学習指導要領の総則の前文にも、持続可能な社会の構築の観点というのが示されていますが、研究も同じ視点、持続可能ということがとても大事なのだろうなと思っています。岡崎三校の具体的な仕掛けを言いますと、小学校は、1日開催を3日間開催としました。中学校でも「教科ごとに授業提案日を変えたら？」と、私が提案したのですが、副校長の意見は却下されました。考えてみますと、授業の「提案したいところ」が、同じ一日に揃うということには、無理がありますよね、本来で言えば。私が疑問を持って、そう提案したのですが、職員からは、同一開催することで、学校としての一体感を大切にしたいと言われました。なるほど、それも大事な視点だなと思って、1日開催で行いました。

小学校は3日間開催です。1日開催では職員は互いの授業を参観できませんし、参観者からどのような意見もらっているか分かりません。しかし、3日間開催にすると、職員相互が関わることができて良かったそうです。また、複数日開催して良かったことは、所謂つまみ食いの参観が減ったということですね。じっくり1つの授業を

見て、その協議会に参加するという思いで参加してくださる。それから3日間あると、公立学校の立場で言えば、研究会に行きたい人が複数いても、別日であれば参加できる。その結果何が起きたかという、担任をやっている層の参加者が増えたのです。参加人数が増えて、参加者の年齢層が低下した。つまり、校長先生が義理で来るのではなく、本当に必要な人が、必要な時間に来られるようになったということです。大学との共同研究ということで、ミニ講座も3日間、本日もお見えの先生方もご協力いただきましたけれども、大学から、倉本先生、加納先生、森勇示先生が毎日講義をしてくださいました。これも非常に評判が良かったと聞いております。

特別支援学校は、校内研究の見直し、整理ということで、担任、副担任それぞれの研究ではなくて、チーム制による研究を取り入れ始めたと言っています。大学との共同という視点で言うと、特別支援教育講座の先生方に論づくりから協力をいただいています。今までなかった視点として、今年は教科教育の先生方の協力をいただいている。つまり、特別支援教育の視点で、いろいろな助言をいただいていたのだけれども、数学として一体成立しているのか、理科としてはどうなんだなど、教科の視点できちっと授業を見ていくといった、教科教育の先生方との協働も始まっていると聞いています。午前中の半日開催にしたことで、参観者は、終わったあと学校に帰って、子どもたちの顔がもう一回見られるということがとっても良かったとも聞きました。特別支援教育に関わっている先生にとってみると、非常に重い声だと私は思います。

附属岡崎中学校も同じように半日開催で実施しました。時間も来ておりますので、詳細は省きますけれど、成果としては、小学校、特別支援学校に重なります。加えて、附属中学校では、今後どんな仕掛けを考えているかと言いますと、授業研究の日常化ということです。先程、名古屋小学校の橋本先生からもありましたように、イメージは、学びの共同体と同じものなのですが、本校では現在、大学の先生と公立学校から研究協力者3人と共に授業づくりを研究しています。この研究協力者の先生は、私たち自身がこの人にやってもらいたいという人を指名していくという感じが強いですね。そうではなくて、もっと授業づくりの魅力を共有できる仲間を掘り起こしていくという意味で、来年度以降、研究協力者を公募していきたいと考えています。授業づくりに関わるサポーターづくりというのかな、そういうのがイメージです。

最後になりますけれど、持続可能な共同研究への期待を述べたいと思います。共同研究を促進するためのキーワードは何か。これは、互いの資源、互いの魅力を知ること、共有することがまずはスタートではないかということを思っています。絶賛放映中の「下町ロケット」の中で、佃社長が「どんな難問にも必ず答えがある。みんなの力をどうか貸してほしい」とい語っておりますが、この「みんな」というのが、漠然とした「みんな」ではなくて、顔の見える「みんな」であること、これが共同研究として大事なことだと思っています。例えば今、児玉校長先生が大学から校長先生として来てくださっていますが、実は着任前から本校との関わりがありました。教科教育ではない児玉先生となぜ関わりがあったか。本校の職員が、ピンホールカメラを授

業で扱いたいと願い、大学にそういうことに長けた人はいないかということで出会いが始まりました。今日参加している本校清水教頭にも同様の経験がありますので、少し紹介してもらいます。

清水先生：私もわくわくした授業を行いたいと考えています。専門が理科でありまして、本校、入り口のシューズが置いてあって非常に臭いんですね、子どもたちのシューズが。だから、そのシューズの臭い匂いを無くすにはどうしたらいいのかなっていうことを、中学校3年生の菌類のところに絡めて、授業をやりたいと考えました。でも、菌類をやるには私に菌類の知識が無かったので、菅沼先生に「誰か教えて」と言ったら、「じゃあこの人だ」といって岡本先生を紹介していただき、菌の培養とか、それを授業でやらせていただいたということでございます。

鈴木先生：ありがとうございます。突然振ってごめんなさい。繰り返しになりますが、共同研究を促進、進化させていくためには、互いが顔の見える仲間であると共通理解していることが大事なのではないか。以上で終わります。ありがとうございます。

山田部門長：どうもありがとうございました。えっと、ここで附属の先生、地域の事情、あるいは各学校での事情もお話いただいたのですけれど、質問はありますか？ここもう少し詳しく聞いておきたいとか、ありますか？

無ければ、今度は本田先生に振ってですね、附属の方では、個々の研究の概要や共同研究の在り方などに関して、幾つかご提案を頂きました。特に、事例を紹介して頂いて、名附小であれば例えば研究交流会というのをしており、大学の先生が来るにもかかわらず、研究に加わるという感じではなく、公立の先生方にも気軽に公開授業に来ていただいて、参加を促すという形。それからもう少し突っ込んだ形ですと、岡附中ですと公募制で研究協力員を募るという、もう少し能動的な参画の形にするという形ですね。そうした事例を紹介していただきました。

平成30年12月9日

大学・附属学校園共同研究の課題と可能性

愛知教育大学附属岡崎中学校
鈴木 佳樹

はじめに

○働き方の見直しとスクラップなきビルド

1 附属学校園における働き方の見直し

○タイムカード導入

○施設利用時間の制限強化

○研究のあり方の見直し

2 持続可能な研究への挑戦 ―附属岡崎三校のしかけ―

○附属岡崎小学校

○附属特別支援学校

○附属岡崎中学校

おわりに

○持続可能な共同研究への期待





愛知教育大学附属岡崎中学校

◇研究協力員募集

(単元構想、教師のてだて、意見交流の組み立てなど授業づくりについて附中職員と語りませんか)



今こそ、授業で勝負。

愛知教育大学附属岡崎中学校

〒444-0864 愛知県岡崎市明大寺町栗林1

TEL 0564-51-3637 FAX 0564-54-4518



【本田先生】=====

山田部門長：今度は、一般の公立の先生の方から、こういうことを望むだとか、こういう課題があるだとか、これどうにかしてくれだとか、そのあたりも含めてご紹介頂きたいという感じです。それではよろしくお願いいたします。

本田先生：こんにちは。豊明市立沓掛中学校の本田と申します。よろしくお願い申し上げます。座って失礼いたします。私は今、中学校で勤めているのですが、愛知教育大学出身ではなく、途中で大学院に入って丹藤先生にお世話になって、そこで愛知教育大学と2年繋がれたのかなというところなんです。今はどっぷり現場に浸かっておりますので、そういう立場で。小学校の勤務経験も7年ありますので、まあそういう視点から。ただ、附属で働いている方も、もちろん現場にいた方々だと思います。なぜ本田が話しているのだということを地区の方でもちらっと言われましたが、現場の現状をお伝えできたらと思っております。よろしくお願いします。

豊明市の沓掛中学校は、愛知教育大学から車で5分走る程度の近いところです。田んぼに囲まれておりまして、のどかなところなのですが、三河と尾張の境目辺りで、三河の学校の雰囲気も残しながら、という所です。今は豊明市なのですが、その前は日進で働いていました。本地区の教員は長久手、日進、東郷、豊明の4市町を転勤するような形で勤めています。

小中学校の現状ということで、上手に話す話術はありませんが、パワーポイントも使っておりませんので、このままレジメ通りに行きたいのですが、アンケートなどを沓掛中学校の職員それから $+\alpha$ で、自分の知り合いの小学校の先生を含めて取らせて頂きましたので、それを基にお話させていただきます。

小中学校の現状ということですが、2017年3月に愛知県で多忙化解消プランということで県の方も動いていて、本当に「多忙化解消、多忙化解消」ということで、先生が多忙化解消ハラスメントだなんて言っているくらい、何でも多忙化解消で、本当にそれでいいのかな、という意見もあがっております。先ほど言われました月45時間残業、そんなの無理だろうということで、今朝も同僚と話していました。変形労働時間制も、例えば、子育てをしている方々が、7時に帰るのなんておかしい話で、結局年休とらなきゃいけないし、それも無理な話だし、という話も出ております。豊明市でもタイムカードを実施しておりますが、これもICカードをピッとやるものかと思いきや、豊明市はお金がなくて、アルバイトみたいにジーカチャン、ジーカチャンというだけの、それでもタイムカードやるのだなあと思っております。あと部活動の活動時間の制限ということもありまして、去年までだと、日曜日学校に行ったら車がたくさんあったのですが、今年日曜日に行くと車があんまりない。本当に一部の先生ということで、本当にそこらへんは一気に改革というか、もっと抵抗があるのかと思いきや、みんなずっとそれに則っている感じで、タイムカードもまあそれに繋がっているのかと。それから、長期休暇は閉庁ということで、お盆休みに管理当番を置

かない、日直を置かないということで。ただまあ自分は校務主任なので、困っているのは、花の水やり。私はお盆毎日、水やりに行かなきゃいけないと。誰かが被害を被るのかなと思っていますが、これもやっぱり年休を取らなくては、夏季休暇を取らなくてはいけないということで、それも一応課題ではあるのです。それから、夜間電話切り替え。これも豊明市が行っているのですが、7時にはもう電話を切ります。朝の7時まで電話切って、最初これも抵抗があったのですが、保護者も慣れてくると7時前にパーっと電話かかってきてですね、特に問題なく進んでいます。小学校なんか6時くらいから職員が帰ってしまった場合は、もう繋がらないですし、土日でも電話が繋がらない感じで、部活動の欠席連絡もメールで、学校メールを作っておりますので、メールを送ると。これも、トラブル無く、意外とスムーズに行っているのだなというところ。それから、部活動の活動時間も制限。これはちょっと問題があって、結局土日一回しかできないので、強くしたい方はクラブチームを作ってやっているということで、これはいいのか悪いのか。まあ格差が若干できているのもあるのですが、子どもは比較的スムーズに移行しています。それから、行事の精選は大きく影響しておりまして、例えば、遠足を無くす、家庭訪問を無くす、学習発表会も無くす、そういう小学校もちらほらあると聞いております。それから、定時退校日も設けていたり、先程出ました出張の精選というのも行われたりしておりまして、先程の3日間の研究会開催ということでしたが、これもなるべく担任を持たれた方はなかなか行けず、結局担任を持っていない方に振るという感じでやっているのが実情かと思えます。それから、新学習指導要領に関しては現職教育の中心となるところなのですが、やはり担任の中で不安なのは道德教科化です。これは、担任団が、一番課題を持ちながらやっておりまして、現職教育でも道德をやっているところが多いようです。所見をどうやって書くのだ、ということを小学校ではやっておりますが、中学校でも今年から練習を兼ねながら研究をしている段階です。新学習指導要領、そして道德についてもやらなければならないので、先程の多忙化解消と逆行している部分があって、内容が減らされていないにもかかわらず、やることは減らされていない、むしろ増えているけれども、早く帰らなきゃいけないというところで、多忙化解消ハラスメントだということで、話が出てきました。

それから、不登校というのもあります。私は働き出して16年目ですけれども、新任の頃から比べて生徒指導は、例えば、私の学生の頃は廊下をバイクが走ったり、タバコを吸ったりしている話はちらほら聞きましたが、今はそうした生徒指導というよりも、不登校、こう心の内面の生徒指導といいますか、そういうところも。それがどうなるかという、結局、夜おうちに行ったり、お家だけではなくてスクールソーシャルワーカーさんやスクールカウンセラーさんと打ち合わせをしたり、あるいはケース会議を別に持ったりするなど、そうした時間も取られます。もちろん子どものためなので仕方ないのですが、時間を取られているというのが現状で、本当に担任の先生

は大変だという風に思っております。それから、今、中3は進路指導にも焦点を当てなくてはいけません。

それから、年齢バランスでは、うちの地区では、20代・30代がやはり多い。それに比べて40代・50代が少ないということで、指導をするというよりも、もうみんなで何とかしていこうという感じが本当にあってですね。これが、後からアンケートに出てくる「授業研究で何が見たいか」ということに関わってくるのかなと思っています。それが今の小学校、中学校の現状なのかなという風に思っております。

それで、本当は、アンケートを小学校にも取りたかったのですが、なかなか取れなくて、中学校の職員30名+αに調査してみたのですが、その中でも少し気になったところを取り上げて、「附属学校園の授業においてどのような内容の授業を見てみたいですか」というところです（資料1）。「教科指導」「国語、物語、説明文の進め方」「英語の授業の進め方」「自分の教科の学習に主体的に取り組む生徒」、それから「自立活動、作業学習」は特別支援学級ですが、「小中の英語」「理科の考察や予想」「英語のディベート」ということで、各教科の自分の専門の教科を見てみたいという所はもちろんなのですが、小学校の先生ならなおさら理論というよりも実践になります。どうやって発問するのか、それから本当に色々な教科をみていくので、指導書通りの授業をする先生はもちろんおられてですね、それが悪いと言われれば悪いのかもしれないですけども、本当にそれは9教科全部やるというのは難しいところで、それが現状なのかなと。そうした先生方が、授業研究で何を見たいかという、やはりどうやって実践をしているかというところになるのかなと思います。それから、

「教科書を使った生徒中心の授業」という意見も、ちらほら出ておりまして、その先生に聞きましたところ、以前見に行った時に教科書を使わずに別教材で授業やっているのを何度か見て、それなら本当は教科書を使った私たちが使えるような授業を見たい、というのも出ておりまして、それが率直な意見なのかなと思いました。それから、「日常の授業ですぐに活用」というところですね。それから、「普通の授業でも可能」についても、これも聞きましたところですね、エリートの子もたちばかりだから、まあ見ても意味がないというか、そういうようなことを言っている先生もおられて、まあでも自分が聞いたところによると色々なレベルというか、色々な子がいて、しかし、みんなで授業に対して興味関心を持たせるように先生がやっているので良い方向に行っているという話も聞いておりますので、本当にエリートの子たちばかりではないと、他の学校と同じような生徒指導もあるということも聞いておりますのですが、一般の先生方はそういう風に思っているのかなと。それから、「普通の授業の中での主体的な活動」「普段の声かけ」というところ。研究授業ではなくて、いつもの先生がどうされているのかが気になると。それから、これが多かったのですが、「道徳の授業」。やはり今、先生方が気になっているところですね。授業を見たいということが多かったです。それから、下の「学び合い」というところは、豊明市の方では学び合い、学び合い工房、静岡の先生をお呼びして、授業研究を行なってお

りまして、そういうところも見たいということをおっしゃっていました。それから、印象的だったのは、裏のところ（資料2）。「生徒が違うので参考にならない」と。結局ですね、自分たちが持っている生徒とはレベルが違うよ、ということをおっしゃったのだと思うのですが、そこら辺も勘違いというか、分からないのかなど。なかなか理解するのが難しいのかなあということで、これもとても多かったですね。

他にも実はアンケートをしておまして、実際に過去5年間で附属学校に行ったことがあるか、というアンケートを取りましたら、行ったことがあるが8人、行ったことがない人が26人ということで。「ある」と言った方の中にも、資料の通り自分の研究で必要だからとかいう方が多かったのですが、「ない」という方が26人いましたので、「なぜ行かなかったのですか？」と聞いたところ、「どんなことをしているか知らないから」が4人、「行く必要がないから」が10人、「研究発表等に行きたいが時間がない」が12人で、これも忙しいということもあるのかなど。

それからですね、「どのような内容の研究を見たいと思いますか」については、実は「研究」は特には見たくないという方もおられまして、「授業」が見たいのだという方もおられました。ただその中で、「課題などの取り扱い」という方が2人くらいおられましたので、「課題って何？」と聞きましたところ、要は宿題を附属でどう出しているのか、あるいは、居残りをさせているのだけれども、附属中では居残りなどはさせているのか、そういう本当に喫緊の課題について言っておられました。確かになあと。それから、あの授業をやられて定期テストでどういうことを出しているのか、そういうことも、実際を知りたいのだということをおっしゃいました。それから、「道徳の評価の仕方」をどのようにするのか。もちろんですよ。それから、「道徳の授業」も沢山ありました。それから、「普通の単元の誰もが取り入れられそうなもの」ということで、どのような内容の授業を見たいか、それから、どういう研究を見たいかということをおまとめみますと、やはり、教科書を用いて、通常の学級でも可能な授業、それから、現状の自分の公立学校の現状の課題に対応した研究が見たいということで、おまとめみますと、そういうことが言えるのかなと感じました。

そして、3番の「考察」というところですが、今までものは自分の意見というよりも沓掛中学校の職員の意見ということでしたが、そこに自分の意見も交えさせていただくと、多忙化解消というのが、地域、学校、そして各市町に取り上げられているのですけれども、職員数は変わらず、やるべきことは変わっていない、あるいは増えている。それで、多忙化解消とは本当に名ばかりで、結局、みなさん持ち帰ってやり取りしており、新学習指導要領に向けての準備、道徳教科化、小学校英語、本当にとことん教材研究に費やせば、時間があっても本当に足りないのが現状だと思います。だからと言って、教材研究に手を抜けばいいという訳ではなくて、本当にそうしてしまったら意味がないのです。少しでも子どもたちに向かう時間を確保するため、目の

前の課題を少しでも改善させるために、教材研究や喫緊の課題を解決する一助となる授業研究を、私たち現場の教員は求めているのではないかという風に思います。

2番の「実践と理論」というところは自分の意見になるのですが、授業研究を見に行く時、理論を考えずに小手先の授業実践ばかりを求める先には何もないというか、本当にその場限りのことになってしまうと思います。しかし、授業研究を見に行く時に考えるのは、理論よりも、教材研究を如何に授業にしていけるのか、如何に子どもたちに考えさせるのか、教材研究、発問、授業構成、机間指導、評価の実践がどうしても目に付くのではないかなと。これは仕方ないことかなと。どの公立中学校においても授業研究は行われていると思います。ただ、現場で手が及ばないのは、理論のところではないかなと思います。例えば、物語の授業、私は国語科なものですから、どのように授業を行うかについては勿論話し合います。むしろそればかりです。ただ、どのように物語を読むのかという根本的なところは、手が及びません。そうした時間もなければ、なかなか知識も無いと思っております。そう考えると、附属小中学校には、私たちのできない実践、手が行き届かない理論というところをも、もちろん今も示して頂いているのですけれども、今後も示して頂くということで、私たちの実践に生きていくのではないかと、そういう風に思いました。拙い発表ですみませんでした。以上です。

山田部門長：どうもありがとうございました。現場の先生の切実な要望というのは、非常によくわかりました。一方で、少し大きな話になるかもしれませんが、身の周りで解決可能なことを自ら解決していこう、それで及ばなければ、一つ上の例えば附属に、でそれで及ばなかったら大学へ、という図式が見えるような気がしました。また、まず普段の授業を見てみたいという時に、校内研修でもっと頻繁に互いの授業を見合う活動がある所だったら、多分、課題の中でもこういうものがあり、それを整理して、附属に課題としてぶつけてみようだとか、大学の先生に聞いてみようだとか、そうした活動ができるのかもしれませんが。そこが、アンケートの中からですと、多分我々の世代の責任といいますか、所謂ミドル・リーダーの上の世代が、地方の研究会だとか、顔の見える範囲で相談できる組織だとかを、少し形式的に運営やってしまったという感覚が僕に少しあるのですが、そういうイメージが伺えました。チャンネルとしては、附属があるのですが、一般の先生方にとっては、まだ附属でも、おいそれと相談できる感じではないのかもしれませんが。そこは、非常に難しいところです。逆に申しますと、教職大学院などに来られますと、先生と仲間になれますから、大学との直接のチャンネルは作れるかもしれません。そうしますと、校内研修を持ち、課題を洗い出して、私たち大学教員に叩きつけるっていうチャンネルが、本田先生のように教職大学院出られた先生の役割かなあという、感じもいたしました。

何か質問、あるいは、こういうことが論点としてあるのではないかという、ご意見のある先生はフロアにおられませんかね？

2018.12.9

大学・附属学校園 共同研究の課題と可能性
～中学校現場の視点から～

豊明市立沓掛中学校
本田 敏倫

1 小・中学校の現状

多忙化解消

タイムカード・長期休暇閉庁・夜間電話切り替え・部活動の活動時間の制限・行事の精選

新学習指導要領

主体的・対話的で深い学び、現場の模索、学び合い

道徳教科化、小学校英語

現場の模索、所見の混乱、中学校との連携

不登校

外部機関（SC,SSW など）との連携、保護者対応

年齢バランス

20代～30代…多い 40代以上…少ない
指導する立場の方が少ない現状

2 アンケート結果（沓掛中学校職員約 30 名+αに調査）

《附属学校園の授業において、どのような内容の授業を見てみたいと思いますか》

- 教科指導
- 国語、物語、説明文の進め方
- 英語による授業の進め方について学びたい
- 自分の教科（数学）の学習に主体的に取り組んでいる生徒の姿
- 自立活動や作業学習（特別支援学級）
- 小中の英語
- 理科の考察や予想
- 英語の討論（ディベート）
- 新学習指導要領に対応した授業
- 教科書を使った生徒中心の授業
- 日常の授業ですぐに活用できるようなアイデアを学ぶことができる授業
- 普通の学級でも可能な授業展開
- 普通の授業の中でどれだけ主体的な活動が入っているのか
- 普段の声かけ
- 道徳の授業
- 総合（年間計画も合わせて）
- 学び合い

教科書を用いた、通常の
学級でも可能な授業が見
たい！

- 最先端の授業形態、内容、方法等、先取りした研究授業
- アクティブラーニングの授業
- 生徒が違うので参考にならない

《附属学校園の授業において、どのような内容の研究を見たいと思いますか》

- 課題などの取り扱い
- 技能（話す、聞く、読む、書く）を網羅した授業の研究発表
- 新学習指導要領の内容
- 道徳の評価の仕方
- 道徳の授業
- 生徒が主体的、対話的に取り組むことができる手立て
- 生徒が深い学びに向かうための手立て
- アクティブラーニングについて
- 学び合い
- 特設単元でなく普通の単元の誰もが取り入れられそうなもの
- 書く力を高める指導
- 普通の学級でも可能な授業展開
- ICT、プログラミング等、児童生徒の学習意欲や達成感を高めるために活用できる発表を見たい



3 考察

(1) 「多忙化解消」と「授業」

日々目の前の子どもたち、行事、事務処理等、さまざまな仕事に向かう私たち教員にとって、大切なのは言うまでも無く「授業」である。しかし、教材研究がままならないほど忙しさを感じている小中学校の教員が多いのも現実である。そこで、「多忙化解消」に向けて県や市町、各学校において様々な取り組みがなされている。本校においても、タイムカード導入や、夜間閉庁（19時～朝7時までは電話がかからないようになっている）、部活動時間の制限など、多忙化解消に向けて市や地区をあげて取り組んでいる。

しかしながら、職員数は変わらず、やるべきことは変わっていないのだから、「多忙化解消」とは名ばかりである。新学習指導要領に向けての準備、道徳教科化、小学校英語など、全てをとことん教材研究に費やせば、いくら時間が合っても足りないのが現状である。

「だから、教材研究の手を抜けばいい」という訳ではない。少しでも子どもたちに向かう時間を確保するため、目の前の課題を少しでも改善させるために、教材研究や喫緊の課題を解決する一助となる授業研究を、私たち現場の教員は求めている。

(2) 「実践」と「理論」

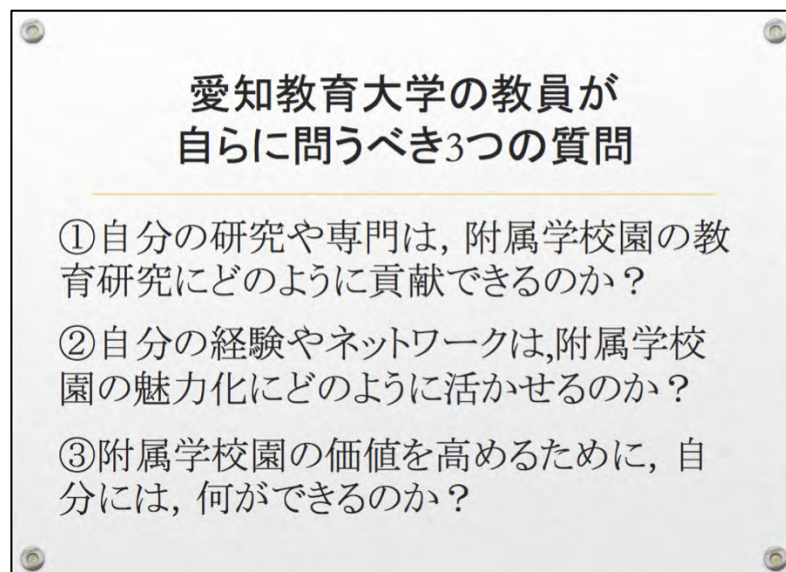
理論を顧みず、小手先の授業実践ばかりを求める先には何もない。しかし、授業研究を見に行くときに、考えるのは、目が行くのは、理論よりも、やはり「教科書教材をいかに授業するのか」「いかに子どもたちに考えさせるのか」「教材研究」「発問」「授業構成」「机間指導」「評価」などの「実践」である。私たちは、目の前の子どもたちに合った授業方法を模索しているのだから、仕方ない。

しかし、どの公立小中学校においても、程度の差はあれ実践研究は行われている。手が及ばないのは「理論」である。例えば物語の授業において、「どのように授業を行うか」は話し合われるが、「どのように読むか」という根本的なところが現場では研究することは難しい。そう考えると附属小中学校園には「実践」のみならず公立小中学校では手が行き届かない「理論」も示していただけると、より現場の「実践」に生きてくるように思う。

【真島先生】 =====

真島先生： 愛知教育大学の真島聖子と申します。

私の方で、まず結論を申し上げますと、「愛知教育大学の教員が自らに問うべき3つの質問」というのを考えました（スライド1）。まず一つ目として、自分の研究や専門は附属学校園の教育研究にどのように貢献ができるのか、ということです。それぞれの大学教員は、研究や専門を持って大学で勤めております。ただ、それが自分の研究だけとか、大学の中で完結するような専門ではなくて、附属学校園の教育研究にどう自分の研究や専門が貢献できるか、それを、問うことが第一かなと思っています。二つ目が、研究や専門だけではなくて、それまでの経験とかネットワークというのを持っておりますので、それを附属学校園の魅力化、よりよい魅力につなげるためには、どう生かしていけばいいのか、どう生かせるのかといった問いも非常に重要ではないかと思います。そして三つ目は、一番と二番を含んでいるのですけれども、附属学校園の価値を高めるために、自分には何ができるのか、ということです。これは、正に行動のところが問われている問いだと思っています。



スライド1

それで、こういう問いを立てておいて、では、話をしている私はどうなのか？というところがもう一つの問いになってくると思うのですけれども、私自身は、社会科教育を専門として、先ほどご発表にあった附属名古屋小学校と附属岡崎中学校の方で、共同研究者として授業の方に関わらせていただいています。また、今年度から、8月に大学附属共同研究会というのが年に一回あるのですけれども、今まで附属高校の先生となかなか共同研究を進めることができていなかったという反省から、今年から、附属高校の先生にも「何かお手伝いできることはありませんか？どんどん大学の教員を使ってください」ということでお話をさせて頂いて、ちょうど社会科の地歴科の先生

から、「総合をやりたいと思っているのだけど。しかも英語の教員と一緒にやってみ
たいと思っているのだけれども・・・」というお話を頂いて、それで本学の外国語教育
講座の内容学の先生にも一緒に参加してもらいまして、附属高校と大学の教科教育の
教員と内容学の教員で一緒になって、今、総合学習の授業の方を関わらせて頂いてい
ます。附属学校園の方で、どうやって自分の研究や専門性が生かせるのか、そして、
研究のネットワークというところでは、自分が韓国の方に留学をしていたり働いてい
たりした経験もあって、その関係で晋州教育大学校との交流もしていて、それで、附
属名古屋小学校と晋州教育大学校附設初等学校の交流のお手伝いもさせて頂いたりし
ております。それから、三つ目の、附属学校園の価値を高めるために自分には何がで
きるのか、といったところでは、今まで自分に一番欠けていたのは、内容学の先生を
巻き込んで一緒に教育研究に関わるといった点が、まだまだ足りていなかったと思い
ました。今までは、教科教育の先生方と一緒に、附属学校の先生方と関わっていたの
ですけれども、内容学の先生の専門性もあるのに、十分に活動、活躍できていないと
いうのは、教科教育の人間がそこをつなぐ橋渡しというか、そういう役目をもっと担
うべきではないだろうかと思いました。それを思いついたのが、木曜日の夜のお風呂
の中でしたので、金曜日に大学に来て、早速、社会科教育講座とか教育ガバナンス講
座の先生で社会系の先生がいらっしゃったので、「自分はこういう風に考えているの
だけれども、附属学校園をバックアップするような、先生の専門性も生かしてもらっ
て、一緒に授業見に行くとか、何か困ったことに相談に乗るとか、何か新しい授業を
一緒に開発するとか、そうしたことをやってみませんか？」と声をかけさせて頂きま
した。ある女性の先生は、「実は私もそれをやりたかったのだけれど、誰に何を言っ
ていいのかわからなくて困っていたから、ちょうど先生に声をかけてもらってよかつ
た」と。そういう方もおられましたし、あと法律を専門としている女性の先生ですけ
れど、「実は自分の専門は法律とか法学だけど、せっかく法教育という分野があるの
に、ここの大学に赴任してそうした授業とか研究とか一緒にやってみたかった。でも
なかなかそれを言い出す場面も、どうしていいのかわからなかったの、言ってもら
えてよかった」と言って下さいました。また、哲学の先生にも声をかけました。その
先生には、「一緒にやってもらえませんか？こういう風なこと考えているのです」と
言ったら、「僕なんかで大丈夫かな？」と言われるのですけれども、「先生のお力が非
常に重要です！」ということで、快く参加して下さいることになりました。そういった
ことをどんどん広げて行ってですね、何ができるのか、それは附属学校園の価値を高
めることに繋がる、そして、大学の魅力もそれと共に高めていけるのではないかと考
えています。

それで、少し話が変わりますけれども、「世界を作り変えたのは誰か」ということ
です。なぜこんな問いを立てるのかというと、実は、今日ご登壇されている先生のお
話にもあったのですけれども、私はこの大学や、大学と附属の関係性をよりよく変えて
行きたい、変えていくためにはまずどこからかヒントが欲しいと思いましたので、世

界を作り変えたのは誰かということで、「GAFA」と呼ばれているものを見てみました。GはGoogleですね。AはAppleで、FはFacebookで、もう一個のAがAmazon。これらは非常に有名な、今世界をひっくり返しているような企業だと思うのです。それで、スコット・ギャロウェイさんという方が、今、本を出していて、その人の研究によると、共通する8つの要素があるということです。一つ目は、商品の差別化。そして二つ目は、ビジョンへの投資。三つ目が、世界展開。四つ目が、好感度。五つ目が、垂直統合。六つ目が、AIの活用。七つ目が、キャリアの箔づけになる。八つ目が、地の利ということなのですが、このGAFAという世界を変えている大きな企業には、そういったところが共通していると。一つ一つ見ていきたいところなのですが、今回自分が特に注目したいと思ったのが、「ビジョンへの投資」というところです。どういうことかといいますと、4つの企業に共通しているのが、非常に理解しやすい大胆なビジョンを提案しているということで、例えばGoogleの場合は「地球上の情報を整理する」。そこに、自分たちの企業は邁進していくのだ、そこを目指しているのだと言います。知を集め、情報を整理し、それを活用してもらえるようにすることで、価値を高めている。Appleはどうかというと、「宇宙を凹ませる」という言い方をしているのですが、これはあのジョブズの独特な言い方でして、世界を少しでも変えるという意味で、Appleの場合、スマートフォンとか新しい機器とか、それが非常に魅力的で、ブランドの価値を高めて戦略的にやっている。そういうある種のカリスマ性とか、そしてシンプルというところですね。そしてFacebookの場合は「世界をつなぐ」。まさに、今まで離れていた人と急にそこで出会ったりとか、異なる言葉や地域でも繋がったりとか、そうした「世界をつなぐ」というビジョンです。Amazonは「世界最大の店」ということで、大きくて今までの小売企業の価値観をひっくり返すくらい、そして、すぐ手元に届くように配達され、価格も非常に安く、色々なものが手に入る。そのためには「世界最大の店」ということです（スライド2）。

この4つの企業に共通しているのは、こういうビジョンを示すだけではないのですね。普通の企業は、ビジョンを示し、利益が上がったら、それを配当金として株主に返します。そうすると、株主は満足感が上がるわけですね。でも、こういった企業は配当金を出さない。出さない代わりに何をするかというと、ビジョンを示して、企業の価値を高めて、配当金を出すためのお金を更なる新しいビジョンに投資する。そうすることでますます企業価値を高めていく。そうしたことに、あなたはチャレンジしているのですよ、株主も一緒になってそのビジョンを追いかけて、一緒になって戦っていきましょう、といった風に資金を集めてですね、大量に自分たちのビジョンに向けて投資ができる。そういう戦略だそうです。

それで、ビジョンを提案するという点についてさらに話を進めます。今、附属学校の中でも、グッド・プラクティスと言われている学校は、どのようなビジョンを出しているのかといいますと、大分大学教育学部附属小学校の場合は「スクラップ&スリム」。それから、島根大学教育学部附属学校園の場合は「魅力化」ですね。それか

ら、岐阜市立長良東小学校、これは公立ですが「啐啄同時」。岐阜大学教育学部附属学校は、「小中連携」ということで、こうしたビジョンを掲げて取り組んでおられます（スライド3）。

理解しやすい大胆なビジョン

- Google: 地球上の情報を整理する
- Apple: 宇宙をへこませる(世界を少しでも変える)
- facebook: 世界をつなぐ
- amazon: 世界最大の店

出典: スコット・ギャロウェイ『the four GAFA 四騎士が創り変えた世界』東洋経済新報社, 2018, p.63, p.130, pp.296-299.

スライド2

理解しやすい大胆なビジョン

- 大分大学教育学部附属小学校: スクラップ & スリム
- 島根大学教育学部附属学校園: 魅力化
- 岐阜市立長良東小学校: 啐啄同時
- 岐阜大学教育学部附属学校: 小中連携

スライド3

それで、一つ一つ簡単に見ていきたいと思うのですが、私がこの4つの学校に実際に足を運んで、校長先生にお話を聞いてきました。また、これからの附属学校のあり方を考えるシンポジウムにも参加してきました。

大分大学教育学部附属小学校の河野雄二校長先生の場合には、まず初めに大変な危機感があったそうです（スライド4）。どのような危機感かというと、実は教員は誰も大分の附属小学校に行きたがらない、公立からそこに派遣されたくない。なぜかというと、年次制が強く敷かれていて、個人の意見が認められない。それから、教科の枠が強すぎて自由な研究ができない。そして硬直化した職員関係があつて、にっちもさっちもいかない。ではどうするかという危機感から出発して、もっと変えていこうと。それで、年に10人くらいですね、大幅に人事交流で教員を変えていき、それから大分の教育委員会、県の知事とも連携をして、「大分の教育は大分の附属で受ける」という、そのパイプをしっかり持った上で、附属の使命を果たすために、子どもや保護者、教職員への過度の負担や前年踏襲をまずは無くそうと。そして、スリム化をしようということで、スタートされたそうです。この大分の附属小学校が評価されている点は、附属の使命を果たすために行った改革のアフター・チェックをしっかりされていて、アフター・チェックをした後に、更に改善をし、また次に繋げていくというサイクルができています。例えば、どのような改革のアフター・チェックをしているかというと、子どもたちに、自己肯定感や他者肯定感をアンケートで聞いたり、全国学力・学習状況調査の正答率を国立学校と自分の学校との差をしっかり記録したりして、その変容をグラフ化しています。そして、ここが一つ大きいのですけれども、教育実習を一つの使命として掲げています。教育実習は、実践力を身につけるために有効だったかどうかということも、附属学校の職員とそれから実習生にアンケートを取って、その有効性もしっかり測っています。それから、公立校への還元という

ことで、今までの研究や教科の研究は無くして、柱としては、外国語と生活・総合を学校全体の柱に据えて、あとは、セミナーという形で実施をし、そのセミナーに公立学校の先生方に参加してもらって、その効果を測っている。そういった取り組みをされています。

大分大学教育学部附属小学校 スクラップ&スリム

- 附属の使命を果たすために子どもや保護者、教職員への過度の負担や前例踏襲をスクラップ&スリム
- 附属の使命を果たすために行った改革のアフターをチェック
- 自己他者肯定感テスト
- 全国の国立校との正答率の差(国語・算数)
- 今回の教育実習は実践力を付けるのに有効であったか
- 公立校への還元:セミナーの実施, セミナーの効果

出典:第3回「これからの附属学校の在り方を考える協議会」資料, 2018.11.24

スライド4

それから、島根大学教育学部附属学校園の場合は、「魅力化」というのがテーマなのですが、この学校園でお話をうかがったのは齋藤英明附属学校園長先生です（スライド5）。齋藤先生のお話によると、まず、5年前にご自身が校長になる時には、学校が赤字になったそうです。その前から、大学としては、かなり財政的に厳しかったと。ですから、必然的に教員数とか子どもの数とか、減らしていかなざるを得ない、そういう状況が前提にあったということだそうです。それで、その齋藤先生はもともと15年間、附属の特別支援学校の方に勤めておられたそうなのですが、特別支援学校は使命を果たしたということで、学習センターに順次切り替えていき、9年間かけて募集を停止したとのことです。それから附属小学校の教職員の数が多くて、財政的に何ともならないということで数を減らしていった、そして、ただ減らすだけでは皆さんのモチベーションが下がるので、きちんと附属の使命、ビジョン、ミッション、そういったものを丁寧に共有して、附属学校部長、校長、副園長、副校長と、一体になってマネジメントをしていこう、附属をより良くしよう、という風にスタートされたそうです。そして、地域に必要とされる附属学校園として、研究そのものの意味とか、発信とか、方法等の仕組みを変えていき、教員の意識改革が必要ということで、そこにも取り組まれたそうです。それまでは、附属学校園は自分たちの研究をやって自分たちが満足して、「さあどうだ、これでやってみるか」という感じでやられていたそうなのですが、それではダメだということで、公立学校の先生たちの方に向かって「何が自分たちに必要ですか?」「どういったことに困っていますか?」「どうい

う風に一緒にやっていきましようか？」あるいは、「自分たちはここが難しいと思って今回授業を提案しましたが、先生方からご意見聞かせてください」といった感じで、一緒に課題について取り組んでいきましようというスタンスをとったところ、公立学校の先生の方からも非常に好評で、一緒に課題を解決していこうという雰囲気が出来つつあるということだそうです。また、先程もお話をしたように、機能の精選・統合を図ると同時に、人数・人員が限られてくるので、どうやって効率的に人を配置するのか。そういったことの見直しもされたそうです。

それから、ここもビジョンに関わるのですが、教育実地研究を通して、島根の教育の発展に貢献するということと、ここははっきり仰っておられましたが、私たちの附属学校園は「子どものいる教育研修センターです」ということで、公立学校の先生たちの課題をきちんと引き受けて、「自分たちは島根の教育の発展に貢献するのだという意識をしっかりと持って取り組んでいます」、ということでした。

島根大学教育学部附属学校園 魅力化

- ミッション・ビジョンを共有—附属学校部長，校長，副園長による一体的な組織マネジメント
- 地域に必要とされる附属学校園として，研究そのものの意味，発信方法等のしくみ，教員の意識改革が必要。
- 附属学校園組織や機能の精選・統合を図るとともに，限られた人的資源を効率的に配置し直す必要。
- 「教育実践研究を通して，島根の教育の発展に貢献する」
- 「私たちの附属学校園は，子どものいる教員研修センターです」

出典：齋藤英明校長「魅力ある組織をつくるためのリーダーの役割」第3回「これからの附属学校の在り方を考える協議会」資料，2018.11.24

スライド5

さらに、岐阜市立長良東小学校鶴飼高男校長先生にも話を聞いてみました（スライド6）。ここは「啐啄同時」といって、教師と児童の気合が一致する教育という風に書いてあるのですが、教師の指導のタイミングと子どもが「さあ伸びよう、さあ伸びたい」「知りたい、分きたい」という瞬間を見逃すことが無いように、そこが一致すると子どもは伸びるのだと、そこをきちんと見とって大事にされている学校です。このポイントは、人が育つ学校ということで、「教師が育つことで子どもが育つ」ということを徹底的にやられています。ですから、教師は本当に研究に対しても熱心ですし、小学校ですけれども教科研究は一人一人が理論を立てて、自分で実践し自分で発表して、色々な意見をもらうという形で行っています。教科部はもちろんありますが、それぞれ個人が研究をしっかりとやるという風で取り組まれています。全職員で全児童を育てるっていうところも非常に大事にされていますし、私が非常に大事

だと思った所は、「どの子にも寂しい思いをさせない学校」ということで、ケア的な関わりとか、子どもの対応も丁寧にされています。そして、評価の部分でもPDCAサイクルを確立して、全職員の協働による組織的な取り組みと指導力の向上をされています。もちろん、子どもを育てる職の洗練化をするためには、働きやすい環境を確立していかなければいけないということで、その点は、校長先生の方でも苦勞されているそうです。こういう公立学校もあるということで、非常に先進的に教科を研究されていますが、「ここでは大学と何か関わりがあるのですか？」とお聞きしましたところ、先進校ではありますが、附属ではないのでそれほど関わりが強いというわけではないのですが、実習を受け入れる学校としても役割を果たしており、準附属のような形の学校だそうです。

岐阜市立長良東小学校 啐啄同時

- 啐啄同時:教師と児童の気合が一致する教育
- 「人が育つ学校」:教師が育つことで子どもが育つ
- 全職員で全児童を育てる
- どの子にもさみしい思いをさせない学校
- PDCAサイクルの確立
- 全職員の協働による組織的な取組と指導力の向上
- 子どもを育てる職務の専念化⇒働きやすさの確立

出典:鵜飼高男校長「平成30年度 長良東小学校 学校経営構想」

スライド6

そして最後に、岐阜大学の教育学部の附属学校は「小中連携」ということで、ここでは3つの目標を掲げておられます(スライド7)。一つ目は、大学の教員と連携・協働し、日々の有効なる教育研究に励むということ。二つ目は、現在およびこれからの教育の創造、並びに教育に関わる社会・地域貢献を目指す。そして、三つ目が、有意な教員を養成する大学の人材育成である教育実習を担うということです。ここは、岐阜県教育委員会の実践フィールド校としての役割と、小中連携を基盤とした教育実践もされています。ここの校長先生は、もともと広島大学の附属を経験されていて、それから大学の教員になられて、附属学校の校長を兼任されているという、須本良夫先生という方が校長先生です。社会科部の授業をみる限りでは、須本先生が大学の教員でもあり附属学校の校長でもあるという立場から、附属小学校の先生と一緒にテーマを決めて、哲学対話をテーマに設定して取り組まれています。ですから、大学教員と附属学校の小と中をうまく連携させようという取り組みをスタートさせられた

ということです。ただし、他の教科では、まだまだそこまで広がっていませんということでした。

**岐阜大学教育学部附属学校
小中連携**

- 1.大学の教員と連携・共同し、日々の有効なる「教育研究」に励む。
- 2.現在及びこれからの教育の創造並びに教育に係る社会・地域貢献をめざす「教育活動・教育実践」を行う。
- 3.有意な教員を養成する大学の人材育成である「教育実習」を担う。
- 4.岐阜県教育委員会の実践フィールド校
小中連携を基盤とした教育実践・教育研究

出典:岐阜大学教育学部附属学校<https://www.fuzoku.gifu-u.ac.jp/>

スライド7

では、愛知教育大学のビジョンは何かといったところなのですが、これはホームページに載っている将来のビジョンというところに関わります（スライド8）。先ほど学長先生がお話された高度化というところですね、それから実践力の育成、職員の学び直しというところで、学校現場が抱える課題に対応する力を持ち、社会を担う子どもたちの未来を拓くことのできる教員の養成と学校教育を支援する人材の養成を行います、ということがビジョンとして掲げられています。では、愛知教育大学の使命は何かといいますと、これは『大学案内 2019』に載っているものです（スライド9）。「愛知教育大学は、広域の拠点的役割を果たす教育大学として、人間理解と真理探究に努め、教育が直面する現代的課題への対応力を有し、子どもたちの未来を拓くことができる豊かな人間性と確かな実践力を身に付けた専門的職業人の育成を使命としています」とあります。また、本学の学長先生が、どういうビジョンをお持ちで就任の挨拶をされているのかということで、これもホームページの「学長の言葉」というところから持って参りました（スライド10）。言われているのは、「愛知教育大学には単科大学ながらも多様な専門性を有する教員に恵まれているという強みがあります」。まず、強みは多様な専門性を有する教員ということですね。それから、「これまでに果たしてきた社会的役割を再確認し、地域に根ざした国立大学としての将来ビジョンを立てて、その実現に努めてまいりたいと思います。そのためには21世紀型のリーダーシップを発揮し、教員養成を主軸としたグローバルな教育大学づくりを目指していく所存です。」ということが書かれています。非常に重要なのは、学長の挨拶とあって、どういうビジョンを提示して、どういう方向性でこの大学を導いていこうとされているのか、そのリーダーシップが非常に重要となります。特にここ、

「21 世紀型リーダーシップを発揮し」とありますので、21 世紀型リーダーシップとはどのようなものだろうということを調べてみました。これは、学長先生が念頭に置かれているものとは違うものかもしれないのですが、こういったことがありますということで、ご紹介です。

愛知教育大学のビジョンは何か？

- 愛知教育大学は、わが国の学校教員の質の向上を目指し、「高度化」を主軸として、「実践力の育成」、「現職教員の学び直し」を行っています。また、学校現場が抱える課題に対応する力を持ち、社会を担う子どもたちの未来を拓くことができる教員の養成と学校教育を支援する人材の養成を行います。

出典：「将来ビジョン」https://www.aichi-edu.ac.jp/intro/outline/vision_of_the_future.html

スライド 8

愛知教育大学の使命は何か？

- 愛知教育大学は、広域の拠点的役割を果たす教育大学として、人間理解と真理探究に努め、教育が直面する現代的課題への対応力を有し、子どもたちの未来を拓くことができる豊かな人間性と確かな実践力を身に付けた専門的職業人の養成を使命としています。

出典：広報・地域連携課「愛知教育大学 大学案内」[GUIDE BOOK 2019]、愛知教育大学広報委員会、2018年5月。

スライド 9

学長就任あいさつ

- 愛知教育大学には、単科大学ながらも**多様な専門性を有する教員**に恵まれているという強みがあります。これを生かしながら、これまでに果たしてきた社会的役割を再確認し、**地域に根ざした国立大学**としての将来ビジョンを立て、その実現に努めてまいりたいと思います。そのためには**21世紀型のリーダーシップを発揮し、教員養成を主軸としたグローバルな教育大学づくり**を目指していく所存です。

出典：「学長のことば」<https://www.aichi-edu.ac.jp/intro/message/message.html>

スライド 10

21世紀のリーダーが自らに問うべき3つの質問

①ビジネスモデルや人生における次の変化をどこに見出しているか？

- 誰と多くの時間を過ごしているか？ どんな目的で？ どこに旅行に出ているか？ 何を読んでいるか？ そして今後変化する可能性のあることについて理解するためにそれらを如何に有効活用しているか？
- 素晴らしいリーダーは、全体に目を通し、未来を自ら生み出す。

出典：ロザリンデ・トールズ(TED@BCG San Franciscoより) <https://logmi.jp/business/articles/92259>

スライド 11

21 世紀のリーダーが自らに問うべき 3 つの質問ということで、一つ目が「ビジネスモデルや人生における次の変化をどこに見出しているか？」ということです（スライド 11）。素晴らしいリーダーは全体に目を通し、未来を自ら生み出しています。そして、二つ目が「個人的、ビジネス的なネットワークに多様性はあるか？」ということで、素晴らしいリーダーは、多様性溢れるネットワークがパターンを知るためのソースであり、解決策であることを理解しています（スライド 12）。そして、三つ目ですね。「過去に成功したやり方を捨てる勇氣はあるか？」ということで、ここが重要な部分かもしれないのですが、最も影響力を持つ発展は、周囲から「あなたの考えは甘い、おかしい、ばかげている」と批判されることに対する感情的なスタミナをつけられると生まれる。素晴らしいリーダーとは、人と違うことをする。リスクをとる

べきだと口で言うだけではなく、素晴らしいリーダーは実際にリスクを取る、と書かれています（スライド 13）。

**21世紀のリーダーが
自らに問うべき3つの質問**

②個人的、ビジネス的なネットワークに多様性はあるか？

- この質問はあなたと全く違う種類の人々と関係性を築くことができるか否か、あなたの許容範囲を問う質問である。
- 素晴らしいリーダーは、多様性溢れるネットワークは、パターンを知るためのソースであり、解決策であることを理解している。

出典：ロザリンド・トールズ（TED@BCG San Franciscoより）<https://logmi.jp/business/articles/92259>

スライド 12

**21世紀のリーダーが
自らに問うべき3つの質問**

③過去に成功したやり方を捨てる勇気はあるか？

- 最も影響力を持つ発展は、周囲から「あなたの考えは甘い、おかしい、ばかげている」と批判されることに対する感情的なスタミナをつけられると生まれる。
- 素晴らしいリーダーは人とは違うことをする。リスクを取るべきだと口で言うだけではなく、素晴らしいリーダーは実際にリスクを取る。

出典：ロザリンド・トールズ（TED@BCG San Franciscoより）<https://logmi.jp/business/articles/92259>

スライド 13

それで、これらを踏まえて、理解しやすい大胆なビジョンは何だろうと考えた時、私の考えなので不十分な点はあると思うのですが、学長先生は「愛知教育大学は子どもたちの未来を拓く大学です」ということを大切にされていると思います（スライド 14）。そうすると、子どもの未来を拓くということは、愛知教育大学という大学は子どもをきちんと見て、その未来を拓くわけですから、多様な専門性を有する教員が、もう一つの強みである多様な特色を有する附属学校園を支える、あるいは一緒になって応援するとか、何か新たなものをうまく開発する、そういう関係性を作っていくということですね。なぜそうなのかといいますと、本学においてどこに子どもがいるのかといいますと、一番身近な存在は附属学校なのですね。愛教大の中で、学校の中で子どもが見えるというのは、附属学校に行けば、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の全ての校種において、子どもの姿が見えて、子どもの未来と一緒に考えることができます。であるからこそ、多様な専門性を持った大学の教員と様々な特色が異なる附属学校であるからこそ、他の大学や他の附属にはない魅力を出せるのではないかなと思います。そして、地域に根ざした国立大学とは、地域に愛され、必要とされる国立大学だと思います。なので、公立学校の先生方にも足を運んでいただき、一緒に考えて、「やっぱり愛教大は大事だよ」あるいは「附属学校本当に助かるね、なくては困るね」というような大学であり附属学校園にしていきたいと思っています。そして、最後ですね。学長先生は、グローバルな教育大学を作ることを目指されています。グローバルな教育大学は、グローバルな視野を持って、困難に立ち向かい、挑戦し続ける大学だと思います。今、世界的にも、色々な意味で日本の国内でも厳しい状況がたくさんありますが、それらに立ち向かってさらに挑戦し続ける大学であり、そして、附属学校園でありたいと思っております。

理解しやすい大胆なビジョン

- 愛知教育大学:子どもたちの未来を拓く
- 多様な専門性を有する教員が,多様な特色を有する附属学校園を支える
- 地域に根ざした国立大学とは,地域に愛され,必要とされる国立大学である
- グローバルな教育大学は,グローバルな視野を持って,困難に立ち向かい,挑戦し続ける大学である

スライド 14

最後にもう一回問うべきですね,最初の3つの問いです(スライド1)。これから大学教員の中で,教科教育だけでなく内容学の教員と一緒に,この3つの問いが本当に上手くできているかどうか,そういった事を振り返りながら考えていけたらなと思っております。

参考文献は以上の通りです(スライド15)。以上でございます。ありがとうございました。

参考文献一覧

- スコット・ギャロウェイ『the four GAFA 四騎士が創り変えた世界』東洋経済報社, 2018。
- 第3回「これからの附属学校の在り方を考える協議会」資料, 2018.11.24。
- 齋藤英明校長「魅力ある組織をつくるためのリーダーの役割」第3回「これからの附属学校の在り方を考える協議会」資料, 2018.11.24
- 鶴飼高男校長「平成30年度 長良東小学校 学校経営構想」
- 岐阜大学教育学部附属学校<https://www.fuzoku.gifu-u.ac.jp/>
- 「将来ビジョン」https://www.aichi-edu.ac.jp/intro/outline/vision_of_the_future.html
- 広報・地域連携課『愛知教育大学 大学案内[GUIDE BOOK 2019]』愛知教育大学広報委員会, 2018年5月。
- 「学長のことば」<https://www.aichi-edu.ac.jp/intro/message/message.html>
- ロザリンデ・トーレス(TED@BCG San Franciscoより)
<https://logmi.jp/business/articles/92259>

スライド 15

【質疑応答】=====

山田部門長：どうもありがとうございました。先ほどご紹介いただいた4つの学校の中で、岐阜大はグッド・プラクティスに選ばれていませんね。それで、前の二つは文科が選ぶグッド・プラクティスに選ばれている学校です。僕の独断的なまとめですけど、前者は典型的な地方大学の附属学校という感じで、それを非常にスリムにスクラップした感じですね。こうして、グッド・プラクティスに選ばれていると。二番目は、非常にカリスマ性の高い校長先生が、大胆に附属に教員研修センターとしての役割、この近くで行きますと東郷町の県教育総合センター近くに大学があって、その役割をそのまま附属を持ってきたイメージかもしれません。以前、真島先生ともお話したのですが、こうなると大学は要るのですか？大学の附属である必要はあるのですか？という話になるかもしれません。我々の研究テーマからすると、少し物足りない感じするグッド・プラクティスかもしれません。

それで、時間がきていますので、あまり議論する時間もないのですが、こうしたグッド・プラクティスを踏まえて、また4人のお話を聞いて、最後にフロアの皆さんから、1つぐらい、附属の在り方等に関してどういう事を望むかについて、登壇者の先生にお伺いしてもよいかと思うのですが、どうでしょう。こういう点を聞いておきたいとか、あるいは、こういう点について視点が足りないのではないのかとかいうこと、フロアの先生方の中で聞いておきたいことがある方はおられますか？

飯島先生：愛知教育大のスタッフでもあり、附属高校の校長でもある飯島と申します。先ほどいくつか学校が出ました。それで、違う特徴としては、小さい大学だと思うんですよ、ある意味。例えば、教委研で福井大に伺うと、身近だなと思ったりする。規模が小さいから連携しやすいのですよね。例えば、附属小中、あるいは附属高校に、数学の学生を連れて行こうと思っても、もし全員連れて行くとすると小学校免許の学生だと100人だったりするものだから、なかなか連携が上手くできない部分もあったりします。例えば今のお話にあった学びの共同体という話でいくと、学部生にしろ院生にしろ、あるいは大学教員にしろ、附属の方と上手くやりたいなと思っても、みんなが行ってしまったら多分破綻するという面があります。こういう大きい大学の中で、附属を上手な規模での学びの共同体にするにはどうしたらいいか、ということに関するアイデアを教えていただけるといいなと思うのですが、いかがでしょうか。

山田部門長：できたら一言ずつお伺いしたいのですが、ちょっと難しいですね。ここ愛教大は岡崎と名古屋で二つに分かれていてですね、またこれが少しややこしいことをまた起こしていますよね。そういう点も踏まえて、何かこうアイデアというのか、僕なりのまとめ方ですけど、要は顔の見える先生とのつながりを作り、附属がハブになって大学とのやりとりはします。公立の人たちも引っ張っていかうという。そういうコミュニケーションの2段階のうちの、附属の先生は、中間のところにいる感

じです。上も下も事情がわかった先生が附属の中にいるから、下は上に突き上げればいいし、大学は大学で注文をすればいい。これは、小さいところならOKですが、大きくなると途端に破綻するということがありますね。それについて、何かよいアイデアが頂けないかなという質問だと思うのですが、これは大学の先生から聞いた方がいいと思いますので、真島先生からどうですかね？

真島先生：私ははじめ思ったのですが、大分も島根も、同じ敷地に3つ揃っている。だから、スリッパでも行けます、みたいな。そうした関係であり、地域性もあって、そうした規模なのですね。しかし、本学は、離れているということで。でも、逆に、名古屋と岡崎の、もちろん共通のビジョンも大事だと思うのですが、それぞれの特色を明確に今まで持っている訳で、それをしっかり打ち出し、敷地の中には幼稚園と小学校と中学校とがあって、岡崎の場合は若干離れていますが、しかし公立学校もうまく巻き込んでやっているように思います。あと、附属高校と大学が同じ敷地なのに十分に共同研究がなされていないのであれば、そこはやっぱりまずはやって頂くと。刈谷地区と岡崎地区と名古屋地区、それぞれの価値とか魅力とか良さを、しっかり連携を高めて、そこで新たに打ち出せるものはあると思うのです。さらに、今、橋本先生も、体育で岡崎と名古屋を交流させたり、社会でも岡崎と名古屋と一緒に授業を見にいたり、研究会に参加したりというのをやっています。色々な校種も飛び越えながら、地域も飛び越えながらやって行くのと同時に、まずしっかり核を作っていくという所で発信していくっていうのは、あるのかなと思います。

山田部門長：あの、もう少し皆さんに考える時間を。唐突ですが、愛教大に学生が入学しますね。その時に、第二の母校を附属7校から選べと言って、新入生はそこに半分所属していて、実習だとか、実習までは行かないとしても、授業観察に行ったり、先生が連れていったりすることはできそうな気がします。それを一般校にまで広げてしまうと、サポート実習を今やっていますが、それに近くなるかもしれません。要は、ハリーポッターで言うところの、ドミトリーに所属するとか、そういうイメージです。そういうのがあると、個人的にはいいのではないかと思います。それでは、本田先生、すみません。

本田先生：はい。自分は、愛知尾張の方なので、附属小中というと名古屋の方に見に行きますが、岡崎小中には自分で希望しないで行くことはありません。一度行ったことがあるのですが、別々の場所にあって、別々の事をやっていて、でもそれは現場の教員にとってみれば、附属といえは自分名古屋の方ってイメージが強いので、現場の人間にはちょっとよく分からないところです。これは別の話かもしれませんが、自分は豊明市で、愛教大はとても近いのですが、教育実習に沢山学生が来て、学生サポーターも沢山来ているのですが、一番肝心の教員と愛教大の繋がりは全くありません。それこそ学び合いで指導教科の先生をお呼びするのであれば、一番近い愛教大の先生をお呼びすればいいのにと自分は思いながらも、今3年目なのですけれども。そういうところには、違和感を感じています。感想しか言えませんが。

山田部門長：それはその通りかもしれません。実態がそうになっている。次に鈴木先生。

鈴木先生：はい。何が問われているかよくわからなくて、ごめんなさい。

山田部門長：えっと、要は、小さい大学だと非常に改革しやすい。学生も子どもも教員も規模が少なく、みんな顔見知り。しかし、うちですと、学生数がものすごく多いし、大学と附属も離れている。顔見知りになるにしても、昔ですと、例えば、我々も附属に年に一回程度しか行かないなど。そうした状況をどうにかしたいのですが、何か良いアイデアはないですか、という質問かもしれません。

鈴木先生：明確にこれをやればいいということがあれば、もうやっていますよね。少なくとも、今日ここにこれだけの方が集まっている事実が、私は大事なのかなあと思っています。愛知県は学校数が多い。だから、様々な教育施策については、「県は何もしてくれないのではないかと疑問に思うこともしばしばありますが、実はそれくらいの歩みでしかやれないほどの学校数があるということです。例えば、三河だけで中小500校。これは、ある一つの県の学校数を超えるレベルです。そこに名古屋があって、尾張があって、三河と三つあるわけだから、当然、物事は一気に進みません。こうやって集まって、それぞれの意識を高めて、というのが愛知流なのかなとも思います。「スピード感がない」と言われてしまえばそれまでですけども、それぞれが、それぞれの役割でやれることを訴えて行くことしかないのかなって思っています。先ほど、私が研究協力者を募集しますと言いましたが、このことを進めることも、附属が単独で力んでも駄目なのです。現場の校長先生方、教育委員会の理解があってこそその実現であり、それを進めていくための手順が組織的にあるということが愛知の教育の強みでもあると思います。明確な回答でなくてごめんなさいという感じでですけども。それぞれの役割を自覚して、みんなで頑張っていきましょう。

山田部門長：遅々として進めないところはあるけれども、手順を踏まえているので、システムがかっちり固まったら、その後はぐーっと動くという、そういうイメージは確かにあるような感じがしました。それでは、橋本先生、お願いします。

橋本先生：答えになっているかはわからないのですが、先程、本田先生が現職教育で静岡大学の先生を呼んでということでしたが、自分は、そこに附属学校があるから、附属学校を介して、例えば、現場の先生が愛教大の先生と繋がったら最高だなと思っています。現に、体育の学習会に公立学校、名古屋の先生が来てくれました。そこから、その学習会に大学教員の先生、縄田先生なのですけれど、縄田先生とお近づきになられて、自分を乗り越えて、先々週くらいに、バレーの単元で大学の先生と一緒に授業したと。最後には、その単元の終わりに学生まで巻き込んで、小学校6年と大学生が一緒に授業をやっていました。そういったことで、附属学校がそういう拠点というか、パイプ役になればなど。附属学校にきた先生も、いずれ戻ったらミドル・リーダーになるので、自分だったらですね、美味しい話は、公立学校に戻ったときに、附属で築いた関係を生かして、加納先生とも知り合い、真島先生とも知り合い、磯部先

生とも知り合いなので、現職教育でお呼びできるなど。何か分からないことがあれば、「もう先生来て！」と言ったらよいというのが、自分の中ではあります。

山田部門長：はい、それでは、どうもありがとうございました。時間が大分過ぎてしまいましたので、1部はこれくらいにしたいと思います。どうも登壇者の先生方、色々にご無理を言って申し訳ありませんでした。ありがとうございました。

(編集 山田篤史)

第3章：研究会第2部のまとめ

第2部では、大学・附属学校園共同研究体制についての課題や取り組むべき（取り組みたい）研究課題を洗い出し、それについて現状の共同研究体制はどのような連携や研究が可能かを小さなグループで検討してみる、という活動を行った。想定したプログラムは、以下の通り（全体で80分）である。

グループ分けは、参加者名簿を頼りに、できるだけ教科毎のまとまりを意識し（教科は同じだが、異なる地区同士の交流ができるようにし）、「国語」「算数・数学」「生活・社会・情報他」「理科」「英語」「音楽・美術他＋幼稚園」「保健体育」という7グループで議論を行った。

ワークショップ形式によるディスカッション

- ① できるだけ教科や校種でまとまって島を5つ程度作りましょう。
- ② 各自、「取り組むべき研究課題」や「やってみたい/やって欲しい研究課題」を付箋に書いて、模造紙の左側に貼っていきましょう。（10分）
- ③ **GW:** 提示された研究課題を整理して、幾つかにグループ化（＋ネーミング）してみましょう。（15分/25分）
- ④ 各自、グループ化された研究課題を選び、その研究課題に対して、附属と大学はどのような連携・共同研究が可能か、妄想も交えて付箋に書き、ドンドン付箋の右側に課題に対応させて貼っていきましょう。（10分/35分）

ワークショップ形式によるディスカッション

- ⑤ **GW:**「研究課題」（模造紙の左側）と「連携・共同研究の方法・方針等々」（模造紙の右側）のペアを整理し、実現可能と思われるもの/良さそうなもの/今すぐ実行してほしいもの等々について議論し、島毎に2つほど選んでみましょう。（15分/50分）
- ⑥ 各テーブルの意見を「まなボード」を使って発表しつつ、議論してみましょう。（残り30分）

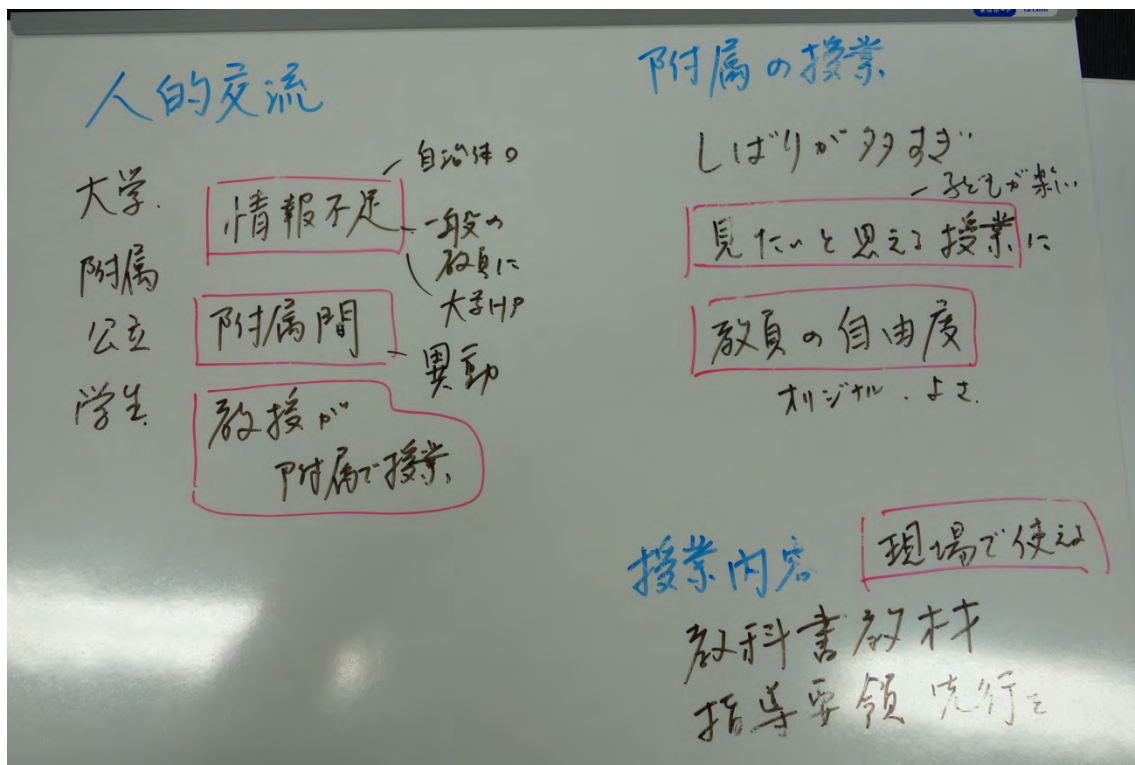
- (1) 附属学校園と公立学校が抱える研究課題。
- (2) 現行の大学・附属共同研究体制を踏まえた各附属学校園における「教員研修機能」の現状と課題。
- (3) 大学・附属共同研究体制が果たしうる役割と研究課題の新たな方向性。特に、地域の現職教員の指導力向上と公立学校に向けた汎用性のある研究テーマ。

会場前方には、上記のスライドを提示し、「取り組むべき（取り組みたい）研究課題」という点についても説明したが、議論の中では「現状の大学・附属学校園共同研究体制についての課題」と「その対策」に議論が集中することになった。提示した案とは若干異なるテーマについて議論がなされた点は、運営・司会者のテーマ設定の不味さやワークショップの取り回しの責任もあるが、参加者には、（今後研究したいことというよりは）そもそも「まずは現状の課題の洗い出しとその対策」が、「議論すべき課題」として捉えられたのだと思われる。

しかし、そうした率直な議論故か、かなり具体的な課題が浮かび上がり、今後に向けての解決策についても興味深いものが多く提案されることになった。

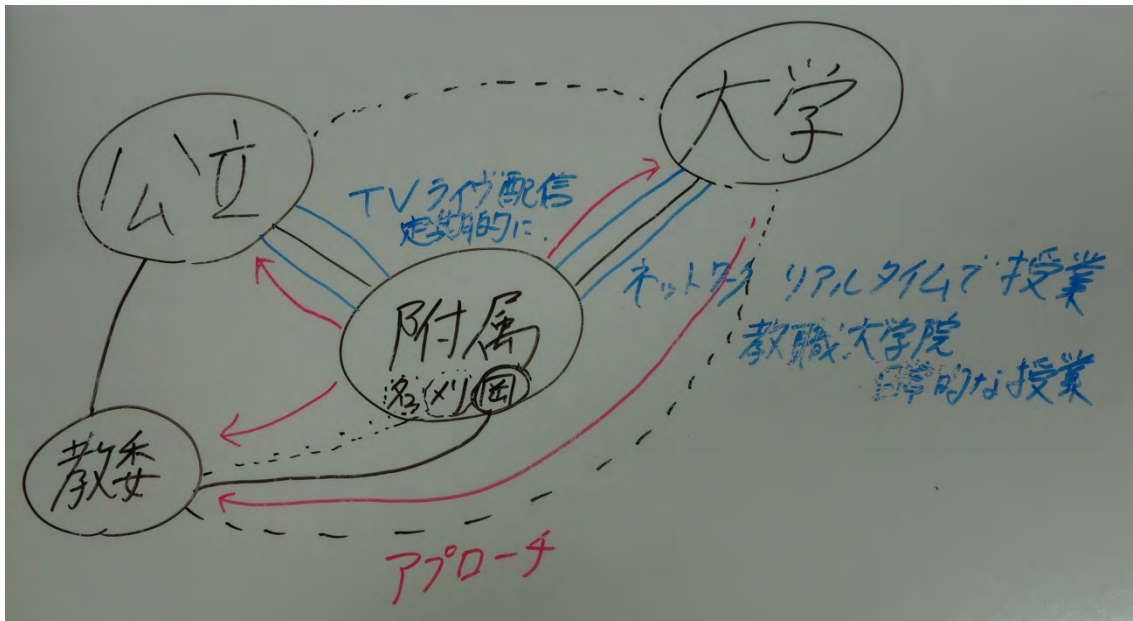
次ページ以降には、各グループの議論を取りまとめたホワイトボードとその紹介の要約を掲載する。ホワイトボードの紹介の要約は、本稿執筆者の要約であり、各グループの真意を十分に汲み取っていない恐れがある。その点についての責任の一切は、本章執筆者（山田篤史）にあるので、各グループの皆様にはご容赦頂きたい。

■ 国語グループ



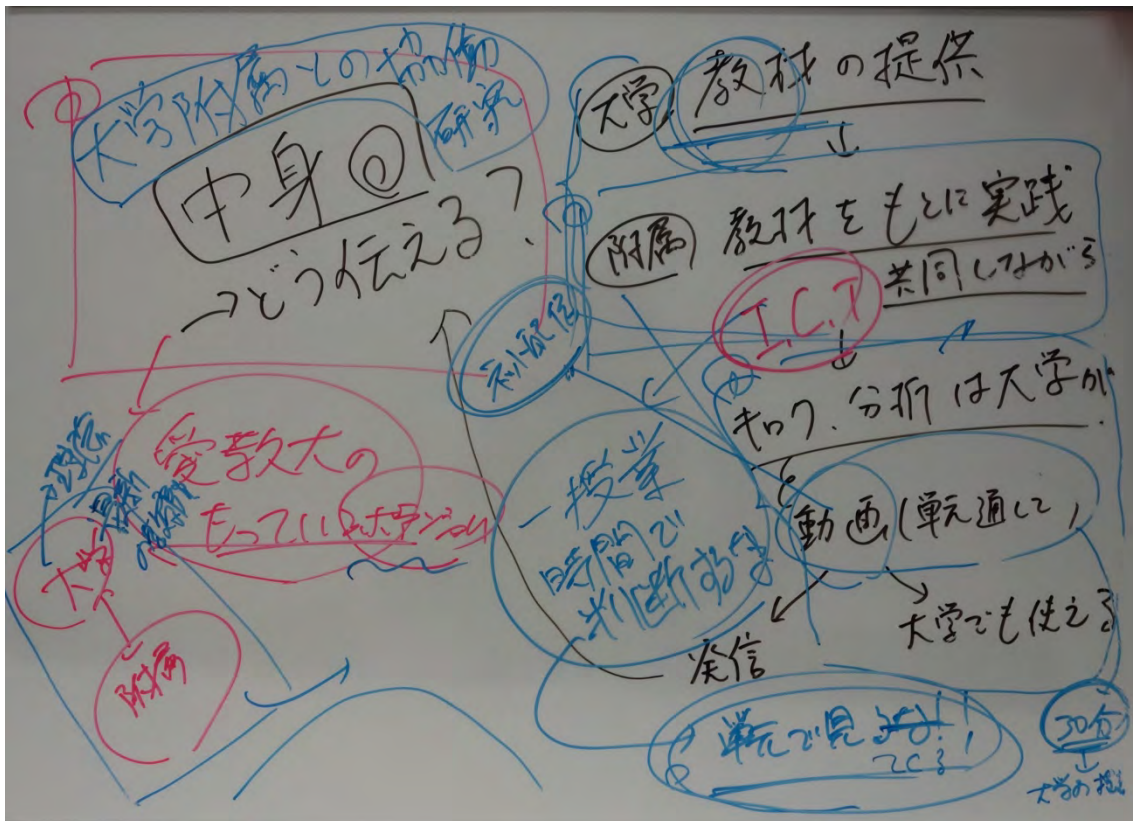
- ・ 国語では、大まかに「人的交流」「附属の授業」「授業内容」の3つのポイントについて議論した。
- ・ 「人的交流」の中でも、大学教員と公立学校教員との交流。公立学校教員が、大学教員に指導を求めようとしたとき、どの大学教員がどのような研究をしているのかが分かりにくい。例えば、大学 Web ページのトップにあるとよい。また、附属間の教員の異動（例えば、名古屋・岡崎間、中高間など）があると、授業スタイルも変わるのではない。さらに、大学教員が附属で授業をする（できる）機会を増やすことができるとうい。
- ・ 「附属の授業」に関しては、先ず、縛りが多すぎるのではないかという点。次に、見たいと思える授業にして欲しい。特に、子どもの変容がその時間に見られるような、子どもの生の声を聞くことが出来るような授業を望むという点。さらに、附属の授業の縛りのために、その教員のよさが生かしているかの懸念があるので、できれば教員の自由度があるとよいだろう。
- ・ 「授業内容」については、現場で使える授業を見たいということなのだが、特に、教科書教材を使った授業を見たいし、新学習指導要領に沿う先行的な取り組みがあると有り難い。

■ 算数・数学グループ



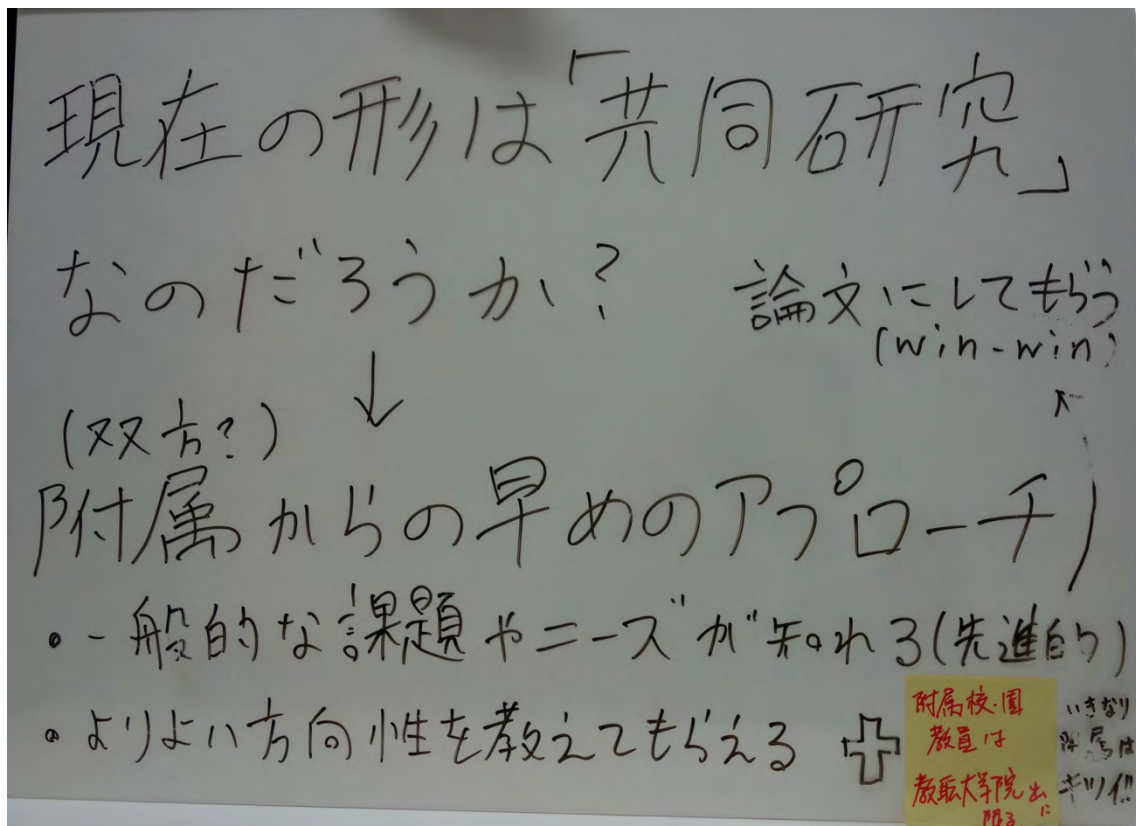
- ・ 算数・数学で一番話題になったのは、「授業をもっと見て欲しい」という点。
- ・ 例えば、授業公開については、名古屋・岡崎双方の研究会で、一方の附属の教員が他方の附属の授業を見に行くという交流は少なく、大学からのアナウンスや奨励も少ないのではないかと（附属にしてみれば、もっと研究会には参加して欲しいとのこと）。
- ・ 大学から授業に対する提案がもっとあってよい。
- ・ 日常的な授業に関しては、例えば、ネットワーク（ライブ配信）を使って、授業を見ることが出来るシステムがあってもよく。例えば、木・金に大学である数学科教育の授業で、附属の授業が見られるとよい。複数時間の授業（例えば、探究的な授業）などは、ICTを上手く使い、授業をアーカイブしておくことは、特に教職大学院の授業を考へるときには重要だろう。
- ・ 附属教員が、一般の公立学校に出向いて授業をするという機会があってもよい。

■ 生活・社会・情報他グループ



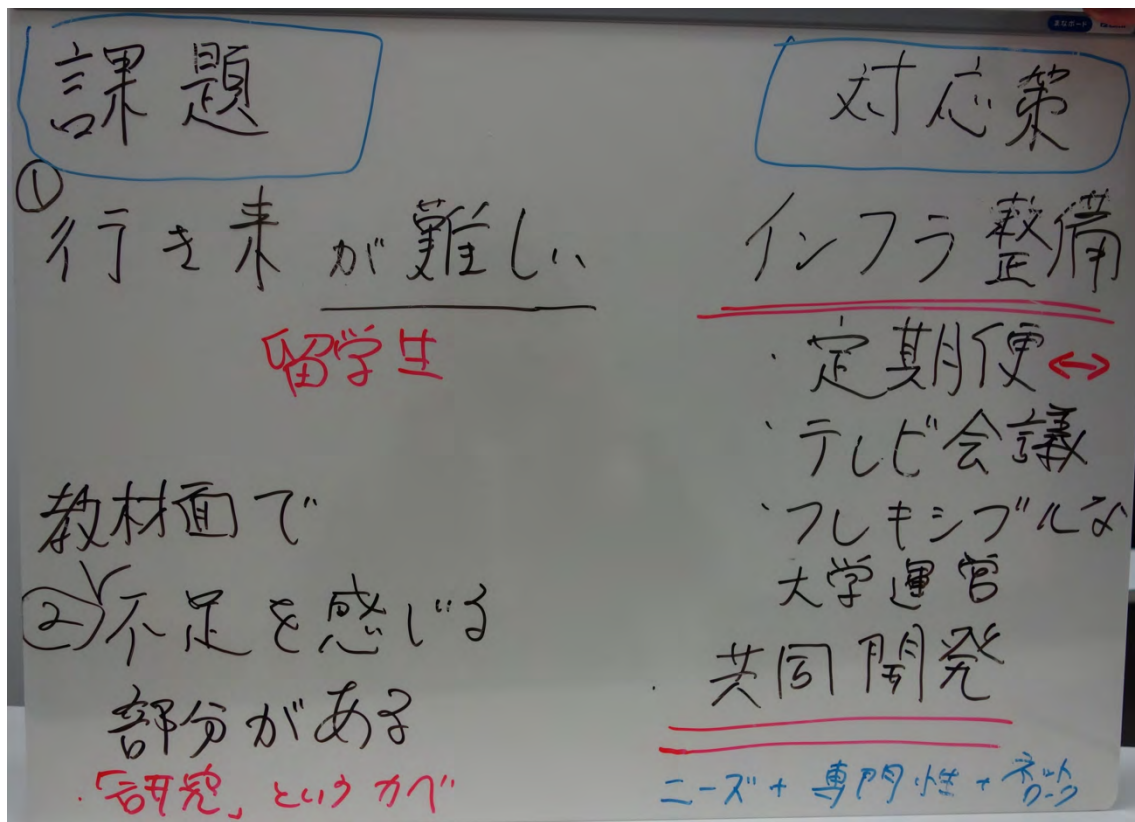
- このグループで議論したのは、大学と附属が持つポテンシャルを最大限活かすために「大学と附属との協働（共同）研究をどのように伝えるのか」について。
- 両者が持っているものは異なり、大学であれば理論研究や最新教育事情、附属であれば子どもに常に対峙していることになる。子どもの姿から授業をつくることを考えると、優先度（出発点）は附属になるだろうが、「この教材・カリキュラム等についてもっと深く知りたい」となると、大学の研究者に聞いた方がよいことになり、そうした連携がもっと出来るとよいだろう。
- 附属の教員から、公開研の一つの授業しか見てもらえない（そこだけで評価を受ける）ことは歯がゆく、できれば単元全体を通して見てraitたい（評価してもらいたい）という思いがある、という意見があった。その改善策としては、単元全体の授業を動画記録する計画をして、大学教員と逐次的な授業プランの改訂をしたり、一連の授業と授業づくりのプロセスを動画配信したりするなどが、（やや大がかりではあるが）構想できるだろう。そうした動画資産は、全国の注目を集め、附属の研究発信に大いに貢献するだろうし、大学の授業づくりに関する授業に使うこともできる（将来的な教員に向けての発信にもなっている）。また、そうした授業を見た学生が、「将来附属教員になってこうした（あるいは新たな）授業をしたい」と思ってくれるかもしれない。

■ 理科グループ



- ・ 現在、附属の研究の進め方として、学校の論を考えて大学教員にアドバイスを求めても、大きな変更は難しいことも多く、また研究授業では検討会における事後的なアドバイスに留まることも多く、その意味では「共同研究」という形になっているかが問題点として指摘できる。
- ・ 解決策の第一は、まず、論を固める前のかかなり早い段階から大学教員にアプローチしてアドバイスをもらうことだろう。例えば、「先進的な取り組み」「一般的な課題・ニーズ」などについては、附属教員よりも大学教員の方が詳しいと思われる。一方、研究課題を具体的な授業に落とし込むことは、附属教員の得意としている所であり、その実践を論文にすることは、大学教員の得意とするところだろう（附属教員と大学教員の Win-Win の関係を築くことができる）。
- ・ 二点目として、地域の学校からいきなり附属教員になり、いきなり研究提案をするのはハードルが高い面もあるので、附属1年目は教職大学院に入り、そこで学んでから附属教員としての研究を始めるというステップがあってもよいのではないかな。

■ 英語グループ



- ・ 課題の1つ目は、「（物理的に離れていて）行き来が難しい」ということ。留学生にも活躍して欲しいのだが、来てもらいにくいという点では問題。この点に関しては、できれば大学にインフラ整備をお願いしたい。定期便は、双方向的に行き来がしやすくなり、連携も強まるのではないか。テレビ会議なども、気軽に使えるとよい。また、学事暦も工夫したり、フレキシブルな運用をしたりして、行き来をしやすくして欲しい。
- ・ 課題の2つ目は、「研究」という言葉が障壁になっている部分もあるので、例えば、日常的な教材研究レベルでの連携協力ができればよいという点。例えば、附属学校の方で「こんな教材があるとよいのだが」という課題があったとき、気軽に大学・附属が相談しあって、共同的に教材開発できるとよい。附属のニーズと大学の専門性・ネットワークが上手くかみ合うことがあれば、附属にしかないアウトプットになるだろう。

■ 音楽・美術他＋幼稚園グループ

課題と対策

・物理的なこと

遠さ・時間が合わない

→ シャトルバス・カリキュラム・授業の中系迷
再編

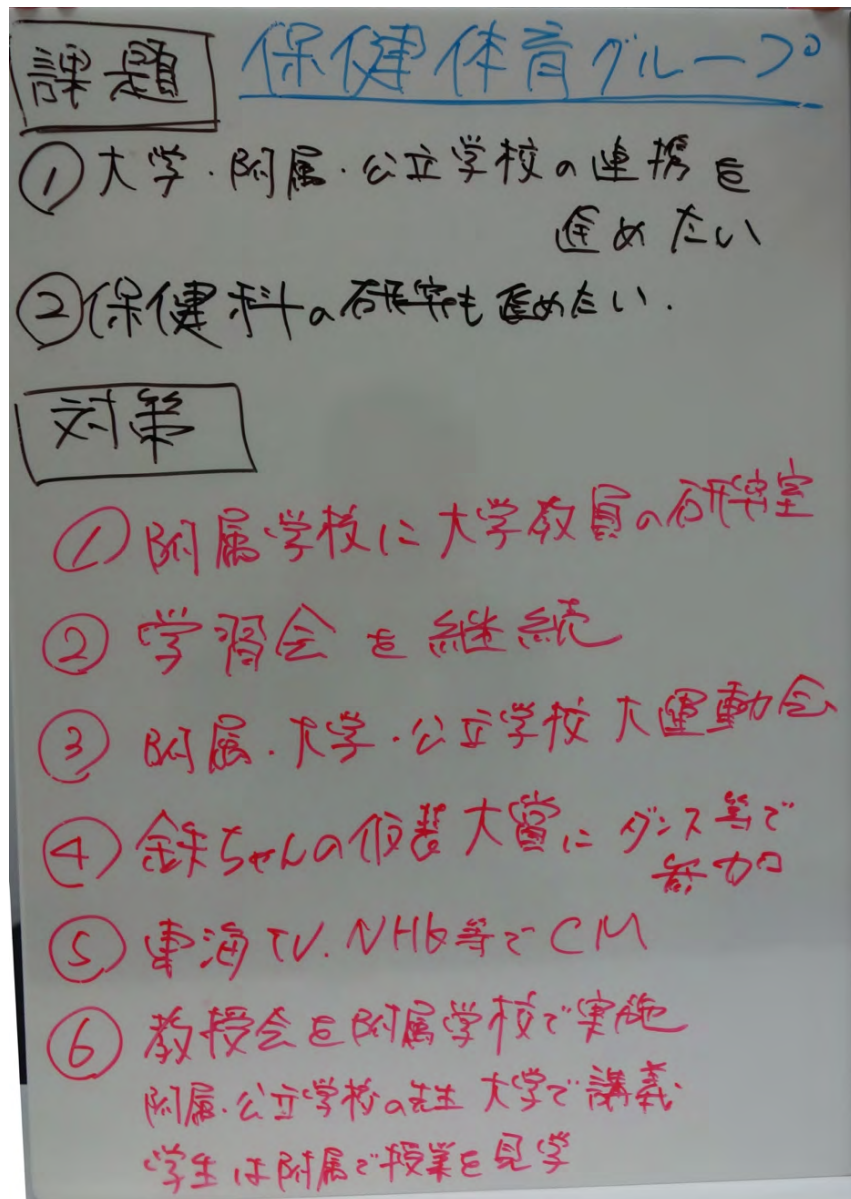
・お互いに連携をしたい。

大学教員が
→ パイプ役になり、現場が必要としている
専門性のある教員を紹介することが必要。

橋渡しができるかどうか

- ・ 附属と大学の教員は双方とも、互いに連携したいと思っている。たとえ専門性が合わなくても、大学教員がパイプ役になり、専門性がある教員を紹介することもできる。しかし、物理的な問題（距離と時間）は大きい。具体的な解決案としては、例えば、水曜の午後にシャトルバスを運行する、大学カリキュラムも「空き」を作るなどの再編をする、などが挙げられる。

■ 保健体育グループ



- ・ 課題は2つ挙げた。1つ目は、「大学・附属・公立学校の連携を進めたい」という点で、2つ目は、「（体育の方は連携も進んでいるのだが、保健体育科という科目なので）保健科の方も研究を進めたい」という点。
- ・ 対策については、沢山挙げた。まず、「学習会の継続」があるが（②）、学習会の継続のためには、附属学校に大学教員の控え室・研究室があるとよい（①）。また、附属・大学・公立で大運動会を開催したり（③）、その連携チームで「欽ちゃんの仮装大賞」に創作ダンスで出場する（④）などの案があり、またそうした活動を使って広報していく（⑤）ということも考えられる。さらに、大学の教員が附属学校に行くことができる環境を作らねばならないので、年に1回でよいので、附属学校での授業参観の後に

附属学校で教授会を開催する，という仕組みを作るとよいだろう。また逆に，附属や公立学校の先生に大学に来てもらい大学で授業をしてもらって交流するという仕組みを作ってもよい。学生も自由に附属学校の授業を見学できるようにするとよい（⑥）。

（文責・編集 山田篤史）

おわりに

本報告書では、2018年12月9日(日)にウインクあいちで開催された教職キャリアセンター・教科教育学部門主催の研究会「大学・附属学校園共同研究の課題と可能性」の開催に至るまでの経緯と研究会の概要を報告した。

この研究会は、直接的には、教職キャリアセンター・教科教育学部門の本年度のテーマである「附属学校園との新たな共同研究」を受けて企画されたものではあるが、その背景には、大学・附属学校園の共同研究体制が従来から抱えている課題を明確化し、双方のメンバーが共有しなければならないのではないか、という暗黙的な問題意識があったように思われる。そこに、「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて：国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書」(国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議，2017.8.29)が示す課題に対して一定の回答を示さねばならないという大学及び附属学校園関係者の危機感が加わり、今回のような企画が動き出し、結果的には、研究会参加者も一定数に上ったのではないかと、というのが率直な感想である。また、教職キャリアセンター・教科教育学部門では、毎年広報誌『SCOPE III』を発行しており、本年度号(No.9)は「附属学校園との新たな共同研究」というテーマで、各教科担当者が執筆をしているので、その原稿を併せて読むと、大学教員側からの課題意識等がより立体的に感じられるかもしれない。

本研究会が趣意書に示した課題に十分に答えることができていないかは全く心許ない限りではあるが、開催に至る経緯と研究会の内容は、できるだけ詳細に記録したつもりではあるので、課題への回答は次回以降に期待することにした。第1章4節のアンケートの記述にもあるように、「大学，附属，公立間の交流がないことが最大の問題でもあるので、このような会が新たなスタートとなって欲しい」という参加者のご感想には、全面的に賛成である。

教職キャリアセンター・教科教育学研究部門部門長
山田篤史

謝辞

幾つか苦勞もありましたが、2018年12月9日(日)には、無事に研究会「大学・附属学校園共同研究の課題と可能性」を開催することができ、ここに報告書も完成させることができました。

先ずもって、研究会にご参加頂きました方に感謝申し上げます。年末のお忙しい時期に、足を運んで議論にご参加頂きまして、誠に有り難うございました。特に、研究会第一部のパネルディスカッションにご登壇頂いた4名の先生（橋本浩司先生・鈴木佳樹先生・本田敏倫先生・真島聖子先生）には大いに感謝申し上げます。依頼に当たっては、皆さん全員にご快諾を頂き、非常に助かりましたし、何より当日に貴重なご意見を頂きましたことを有り難く思っております。また、後藤ひとみ学長には、研究会にご参加頂くと共に、ご挨拶を賜りまして、誠に有り難うございました。学長裁量経費の申請に当たっても、研究会の趣旨や運営に関して何かとご指導・ご助言を頂きまして、誠に感謝しております。なお、学長裁量経費申請に当たっては、菅沼教生理事に大変後押しをして頂きましたし（研究会にも参加して頂きました）、西淵茂男理事（教職キャリアセンター長）にも暖かいお言葉を頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。更に、学長裁量経費申請書と研究会の趣意書の作成に当たっては、丹藤博文先生にも加わって頂くと共に、本田先生の人選など、様々な労を執って頂きました。そうした一連の作業や例会などでは、野田敦敬副学長（教職キャリアセンター副センター長）にも何かとご助言を頂きましたし、研究会の最後のご挨拶でもお世話になりました。両先生には、研究会開催まで、様々なご助言・ご指導を賜りました。誠に有り難うございました。なお、パネルディスカッション登壇者の人選に当たっては、飯島康之先生に鈴木先生をご紹介頂き、大変助かりました。この場を借りて感謝申し上げます。

次に、学長裁量経費申請に当たってご協力頂きました、大学附属共同研究会の各教科代表者の先生にも感謝申し上げます。本学は附属学校園を3地区で抱えている関係上、各教科のまとまりが大学・附属を繋ぐ重要な役割を担っていると思われます。今後も何かとご協力を賜ればと思います。加えて、教科教育学研究部門の一連の例会にご参加頂いた先生にも感謝いたします。趣意書の作成などは例会における有働裕先生のご発案でしたし、ワークショップ形式の議論をする場を設けようという案は真島聖子先生のご提案でした。こうした諸々のご意見を月一回の例会で頂けたことが、研究会開催の大きな助力となりました。誠に有り難うございました。

最後に、学長裁量経費申請からポスター・チラシ作成、予算管理や例会準備等々、細々としたことや不慣れなことを何から何までして頂きました企画課の花井咲絵様と中村彩乃様、更には研究会当日に裏方の作業をして頂いた大学院生の皆様にも感謝申し上げます。
末筆ではありますが、関係各位の皆様には感謝申し上げます。有り難うございました。

教職キャリアセンター・教科教育学研究部門部門長
山田篤史

